

---

# 幼なじみは龍でした

犬丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼なじみは龍でした

### 【Nコード】

N8604S

### 【作者名】

犬丸

### 【あらすじ】

ごくごくフツの高校生の日向。

だが日向は異世界からの使者に命を狙われてしまう。

逃げて来たのは異世界。

そしてその異世界に連れてきた幼なじみの正体は…

## 第一話

「ねーねー。」

「なんだー？」

目の前の赤毛の男は私の問いかけに答えた。

「龍つてさー、本当に火とか吐いたりすんのかなー？」

「……………さーなー？」

「何その間。」

「べーつにいいー？」

「わざとらしっ！！」

いつもの時間。

いつもの会話。

そんなものもろく崩れるもんなんだねー。

「遅刻だああー！！！」

学校までの登り坂を一気にかけ上がる私。

私の名前は日向ひなた

髪も別に目立つ色ではない黒色の長い髪でどこにでもいるごくごくフツの高校三年生。

登り坂をかけ上がると後は下り坂なんだけどこれがまたキツイ…。

「うゝあゝ…」

嘆いている私に届く声。

「乗せてつてやろうかー？日向。」

「おお！？救世主！！」

自転車に乗って現れた赤い短髪の男。（本人曰く地毛らしい…）

名前は火音<sup>かのん</sup>

ちなみに私の幼なじみ。

その火音の自転車の荷台に乗る私。

「お客様ーお客様ー。当社の車のスピードは低速、中速、高速、最速がございますがいかがなさいますかー？」

「最速に決まってるでしょ！？早く早く！！」

ふざける火音に怒鳴る私。

その答えにニヤリと笑う火音。

しまった…!!

「了解いたしましたー。この車は最速で参りまあああああああ  
す…!!」

「ぎにゃあああああああああああ…!!」

自転車のギアを最大にして一気に下り坂を下っていく。

そのスピードはもう…死にそう…。

「か…火音…リバーすしそう…。」

「はあっ!?マジかよ…!!?」

「も…無理…パン出る………」

「ぎゃあああああ…!!ちよつと待て…!!学校あとちよつとだか  
ら…!!」

「「ぎゃあああああああああ…!!」」

結局二人して絶叫していくんだよね…。

## 第一話（後書き）

はい！どうも怜と言います。

知っている方もいるでしょうが『幼なじみは龍でした』をご覧になって下さっているみなさま、これからよろしく願いますm（

ー）m

んで…前作とは違いこの小説は一話一話が短いです。。

その分、更新速度が早くなればいいなあ…（´・・´）おい

こんないい加減な作者ですがよろしく願いますm（――）m

## 第二話

「ぎもぢわるい……」

なんとか遅刻せずに学校に着いた私と火音。

火音は自転車を置きに行ってるし……。

「あの赤頭……」

はぁーとため息を吐く。

「だ〜れが赤頭だ馬鹿。」

「影うつっ……!」

「……（泣）」

いつの間にか後ろにいた火音に辛辣な言葉を発してしまった私。

……まあいつか。

「ほら火音! そんな所でへのへのもへじ書いてないで教室行くよ!」

「お前さ……もつと俺に優しくしようとか思わねえの?」

「思わない。」



断言できるよこれは。

「あ…そ。」

ん？火音が泣いている様な…。

てか早くしないと授業始まる…！

「早く行くよ…！」

火音を引きずって教室に向かう私。

どうか授業が始まってませんように…！！

## 第二話（後書き）

登場人物達の設定忘れてました（汗）

く日向く

身長 160cm

髪 黒くて長い。後ろで縛ってる。

目の色 黒！！

く火音く

身長 170cm

髪 赤い。短髪だけど前髪長い。

目の色 赤。 周りはカラコンだと思ってるけど本人は黙秘。

### 第三話

「授業終わった〜！」

背伸びをする私。

今は放課後。

朝は火音を引きずっていったおかげで授業にも遅刻しなかった。

そしてこれからは…

「部活部活〜」

部活の時間。

私はこの部活の時間が一番好き。

「日向〜？早く行こー？」

教室の入り口のドアからひよっこり顔を出す親友の綾香。

綾香も同じ部活。

「あ、うんちよっと待っててー！」

ちなみに教室の中には私一人。

結構前にみんな部活に行ったり帰宅部の方は帰っちゃった。

火音は同じクラスじゃないし。

でもちよくちよく私のクラスに来るんだよね。

お弁当のおかずを奪いに。

それからもうおかずを巡った攻防戦。

じゃんけんだけどね。

今日は負けて卵焼きを持っていかれた…。

今日は甘く作ったのに…。

「日向はあゝやあゝくうゝ!」

「分かった分かった!」

綾香に急かされたのでスポーツバックを持って私は教室を飛び出した。

## 第四話

部活に向かう私と綾香。

私達の部活は…

「…よっしゃ。」

的の真ん中に矢が当たり、小さくガッツポーズする私。

そう。弓道部。

私の高校はかなり弓道のレベルが高い。

綾香はそんな弓道部の部長。

私は副部長。

綾香は私の方が適任だって言ってくるけど部長って色々めんどくさいし…。

だから私は副部長。

後輩も良い子達ばっかだし…幸せだなあ

「ふー…」

スパーンッ!!

一通り打ち終わり休憩にしようかなと思った時間こえた小気味良い音。

「一本!!」

「よっしゃああ!!」

それと雄叫び。

声のした方を見ると私とは正反対におもいつきりガッツポーズしている火音がいた。

またか…。

火音が部長をやっている剣道部の道場は私達弓道部の道場の一枚壁を挟んだすぐ隣。

壁があるといっても剣道部から聞こえる音はかなり大きくて全部丸聞こえ。

壁についてる窓を覗くと大体剣道部の道場は全部見える。

## 第五話（前書き）

…忘れてましたが…第一話での自転車で二人乗りは良い子はマネしないで下さいね!!（・・・）

## 第五話

そして火音は毎度の如く連続十人斬りをしている。

連続十人斬りっていうのはその名の通り火音が一人で休む事無く十人連続で相手をする事。

さつきもそれで勝って喜んでたっばい。

でもさすが部長って言うのかな？

今まで一回も十人斬り中に負けた事無いんだよね火音は。

小さい頃から剣道やってたからかなあ…？

「ま、いつか。」

私は休憩をしにその場を後にした。

まだ騒がしい火音と部員の声がしている剣道部の道場とは正反対に弓道部の道場は矢が的に当たる音しかしなかった。



## 第六話

「うわぁ…真っ暗ぁ…」

部活を終えた後、顧問の先生に呼ばれて色々部活の話をしてたら遅くなっちゃった…。

ていうか普通そこは部長の綾香が話すんじゃないの!?

なんで副部長の私が…

「…早く帰ろ。」

うん…怒ってても誰かが聞いている訳でもないしね…。

只今の時刻PM8:00!!

泣いても良いですかあああああ!?

叫びたい衝動をぐつと我慢して私は歩きだした。

家に続く住宅街を歩いていると…

『止まれ…!!』

「!?!」

誰かの声がした。

それは聞こえたというより感じたと言った方が正しいのかもしれないけど。

立ち止まった時…

ヒュッ！

ストンツ！！

何かが私の鼻の先を横切って家の塀に刺さった。

「…え！？」

それは剣だった。

## 第七話

ちょ…ちょっと待ってよ!!

こんな住宅街で…

「何で剣!?!」

月の光に鈍く光る剣は刃が両側についていて私が立ち止まらなかったら確実に怪我をしていた。

思わず剣が飛んできた方向を見ると…

「ケタケタケタ…」

「…カカシ!?!」

あまりこちらへんでは見ないカカシが家の屋根に立って不気味に笑い声をあげてた。

しかも一人(?)では無い。

何人もそれぞれ違う屋根の上に立っていた。

その手にはさっきのと同じ剣が握られている。

「メイレイ…メイレイ…ヒナタ…ヒナタ…クロス…クロス…」

剣を投げてきたカカシが喋り出す。

「っ!!」

その声があまりにも不気味で私は家に向かって逃げ出した。

## 第八話

怖い…怖い…！！

意味わかんない！！

何で私がこんな目に…！！

私が走り続けていると…

ダダンッ！！

「きゃああああ！？」

「ケタケタケタ…」

追いかけてきたらしいカカシ達が屋根から私の目の前に飛び降りてきた。

「ヒナタ…コロス…ヒナタ…コロス…」

その内の一人のカカシが持っている剣が鈍く光る。

この騒ぎは誰かに届いているハズなのに誰も家から出てこない。

怖い…怖い…！

殺される…？

やだ…死ぬなんて…やだ…！！

「…クロス！！」

叫ぶと同時に一斉にカカシ達が私に飛びかってくる。

「…っ助けて！！！」

私の叫びが夜の住宅街に響いた。

## 第九話

「…っ助けて!!」

叫んでも誰も来てくれない事を分かっているにも目を瞑って叫ぶしか無かった。

剣で斬られたらすごく痛いんだろうな…。

でもいつまでたっても痛みはやってこない。

「…?」

恐る恐る目を開けると…

「…龍?」

「グルルルル…」

赤い鱗に覆われた大きな龍がいた。

その龍は二本の後ろ足で立っていて背中には大きな羽があった。

龍は力カシから私を庇う様に力カシと私の間に割って入って立っていた。

赤い瞳が私を見つめる。

「…火音?」

口から自然にこぼれた名前。

言った後から困惑する。

なんで火音？

でも直感的ってこういう事…？

「キキキキ！リュウ…！！」

カカシ達は龍に向かって飛びかかる。

「ガアアア！！」

けど龍はしっぽでカカシ達を尻ぎ払う。

「ギギギギー！！」

いくら尻ぎ払ってもカカシは起き上がってくる。

時間の無駄と思ったのか龍は私の方を見る。

『乗れ』

また頭の中に響く様に聞こえた声。

さっき止まれって言ったのもこの龍だったんだ…。

この龍は敵じゃない。



私は龍の背中に飛び乗った。

## 第十話

バサッ！！

大きな羽を広げ飛び立つ龍。

「ギキー！！」

けれどカカシが地面から屋根へ屋根から私達のいるところまでジャンプしてくる。

カカシが私達の目の前に現れた次の瞬間。

「ゴオオオオ！！」

「へっ！？」

ボオツという音と共に龍が火を吐く。

「火い吐いた！？」

龍が本当に火を吐くとは思わなかった私は声をあげる。

「ギイイイ……！！」

黒焦げのカカシが地面に落ちていくのを見送りながら龍は人気の無い所に飛んでいく。

ついたのはもう何年も使われていない空き地。

まわりには家の一つも無い。

「グルウウウ…」

空き地に降り立つと龍が苦しげな声をあげる。

「ちょっと…！大丈夫！？」

私が声をかけた瞬間。

ボンッ！！

漫画でよくありそうな音がして私の視線がかなり下がる。

「重てえええええ…！！」

そして火音が私の座布団状態で呻いてた。

一言言わしてもらおうじゃない。

「誰が重たいよ！！」

「そこかよ！？」

私と火音の怒鳴り声が夜空に響いた。

## 第十話（後書き）

あい。。作者でございまーすノシ

幼なじみは龍でしたでは、あとがきを十話に一度書いていきたいと  
思います。何故だ

まあ…なんとなくですけど（笑）

えゝ…ちょうど十話の火音。

龍から戻ったあと…服着てますよ！！！！なに

いや…一応服着てないとやばいだろうなあーと思った結果ですはい。  
。

日向の前だし…（笑）

変態扱いになる火音…ww

ゴホンツ！えーこんな感じで最近一日一更新を頑張っていますが…  
連休が終わってしまうのでそうはいかないかもしれせん…（汗）

いい加減な作者ですがこれからもよろしく願いますm（――）  
m

感想と誤字・脱字待っています(・・・)

## 第十一話

「あー…単刀直入に言つと…お前はそのままだと死ぬ」

は…？

「んでもって…俺と一緒に俺の世界に来てくれ」

…は？

「以上！」

はああああああ！？

「ちょっと…！意味わかんないから…！だいたい何で火音が龍なのよ！？それに俺の世界って…」

「あーあーもーもーうるせえーうるせえー」

火音が言う。

空き地で口ゲンカをしている私と火音。

だって当たり前でしょうに。

説明だつて最初のあれだけだし…本当に単刀直入ねえ…

「説明は…っとそんなのんきにしてる場合じゃねえな」

「え？」

火音の目付きが鋭くなる。

バンッ！

そしていきなり地面に片手をつく。

すると…

ドオンッ！！

地面から火柱があがる。

「ギギイイ！！」

火柱の中にはカカシがいた。

「しつげえな！！」

「なにこれ！？」

地面はもぐらが穴をほった様に土が盛り上がっている。

なにか土の中にいる…！！

バツ！！

「ギイイイ！！」

土の中から現れたのはさっきのカカシ。

「日向！選択肢は二つだ！！」

「は！？」

火柱をあげながら火音が叫ぶ。

「ここで死ぬか！！俺と別世界に来るか！！どっちだ！？」



## 第十二話

「ここで死ぬか！俺と別世界に来るか！どっちだ！？」

そんな事言われても…！

「早くしろ！！」

火柱をあげながら火音が叫ぶ。

あー！もう！！

「分かったよ！！行く！！火音と一緒に！！」

私も叫び返す。

「りょーかい！！」

火音がニツと笑って言った。

ダンッ！

今度は両腕を地面につく。

すると…

ボコボコッ…！

私と火音を円で囲むように地面が盛り上がる。

まさかカカシ…！？

そう思ったけど違った。

ドオンッ！！

轟音と共に火柱が円の形を描く様にあがり始めた。

「…ッ火音！！」

火柱はどんどん大きくなり私と火音も呑み込んでいく。

不安になり火音の名を叫ぶとぐいつと腕を掴まれ引き寄せられる。

見えたのは火音の髪と同じくらい赤い火。

それを最後に私の意識は途絶えた。

## 第十三話

風の音が聞こえる。

「…………い…」

誰かの声も風の音に混じって聞こえる。

「お…………い……………」

「…………おい……………」

「うおい!!」

「みぎゃあ!？」

目を開けた瞬間火音の顔どアップ。

「…………。」

「…………。」

私が飛び起きた瞬間沈黙。

「はあ…………ッ!!」

盛大なため息を吐いて火音が崩れ落ちる。

「なに？」

「マジでビクった…。気絶するとは思わなかったから…!」

冷や汗タラタラな火音。

ていうか…

「ここどこ!?!」

「今さら!?!」

だってしょうがないじゃん。

見渡す限り草原の丘。

目を凝らして見ると前方に街の様に建物がいっぱいある所がある。

そんな所に私達はいた。

「あー…。とりあえず別世界。」

「うん。それは分かる。」

「んでもって俺がいる国。」

「へー。国とかあるんだ。」

「ああ。一応…な。詳しい説明は街でしてえからついてきてくんね?」

「分かった。」

私と火音は歩き出した。

## 第十四話

「…つかれたああ。」

あれから何時間くらい歩いたんだろう。

私はもうヘトヘトだった。

「弓道部のくせに体力ねえなあ。」

「うるさいっ！」

ケタケタ笑う火音に怒鳴る。

それとこれは別！

「あと少しなんだから踏ん張れよ。」

そう言っただけ火音は前を指差した。

するとさっきかなり遠くから見えていた街がかなり近くまでになっていた。

「あ、そうだ日向。」

思い出した様に火音が言う。

「なに？」

「これからお前自分の事『ヒナタ』って言えば。俺も『カノン』だから。」

「へ？何で？」

「こつちの世界ではそーゆーもんなの。」

「へー。」

まあ別にそこまで変わってないしいつか。

そこからさらに歩くと...

「おお！門！」

龍になった時のカノンくらい大きい門があった。

でも...

「ねえ...カノン！」

「あ？」

「何か怖そうな人がいんだけど...」

「あー...あいつらなー」

カノンの何倍の大きさの大男が二人門の横に立っていた。

「ただの門番だからそこまで怖え奴らじゃねえよ。」

ニシシとカノンが笑う。

そしてそのまま門の方向に歩いていく。

「よっ！」

カノンがいきなり大男の二人に声をかける。

それにしてもよっ！って…

「「……。」」

啞然とした顔の大男の二人。

カノンと私を交互に見て目をパチクリさせる。

ちよっとおもしろい…。

「「カノン様がお帰りになられたあああ！！！」」

突然大声をあげる二人。

「あー…うるせえー。」

カノンがうんざりという表情で呟く。

……ちよっと待ってください。

カノン…様？



もしかしてカノン偉い人だったり？

いやナイナイナイ。

「カノン様がお帰りに…！」

「うるせえよ…！」

…なんなのよ！。

## 第十五話

「まったくテメーらは毎度毎度でけえ声出しやがって！鼓膜が破れる  
つつのー！」

「「も…申し訳ありません…」」

正座をしている大男の二人に説教しているカノン。

「正座つて…。そこまでしなくても…」

私の呟き。

「んな事してジルクに見つかったらどーすんだよ…」

「ほう。私に見つかったらなにかまずい事でもあるんですか？」

「そりゃああいつに見つかったら仕事三昧…って」

「どうも」

「「ぎゃあああああああああああ！？」」

私とカノンが叫ぶ。

私とカノンの真後に気配も無く現れた茶髪に短髪の男の人が言う。

「やれやれ…こちらに来るなら連絡の一つも下さいと何度…おや？」

茶髪の人の視線が私に向けられる。

「これはこれは可愛いらしいお嬢様ですね。私の名はジルクと申します。今度ご一緒に食事でもいかがでしょうか？」

「…えーっと。」

はつきり言っでどう返していいか分かりません。

「ハッ！遂に未成年に手出す気がよ女たらし！」

「今日の夕飯抜きにしますよカノン様。」

「スイマセン。」

…カノンって馬鹿なんだね。

「よければお名前をお教えいただけませんかでしょうか。」

「ヒナタ…です。」

「ははは。そんなにかしこまらなくても良いですよ。私の事はジルクとお呼び下さい。と言うよりため口でお願いします。敬語など慣れていませんので。」

良かったあ…ぶっちゃけ敬語なんて性に合わないんだよね。

ホッとしているとジルクがカノンに言う。

「カノン様」

「あ？」

「この方…ヒナタ様が選ばれたのですか？」

「ああ。間違いねえよ。奴らもヒナタを狙ってきた。」

…なんの事だろう？

「ここでは何ですので城にいかれてはどうでしょう？」

さっきまでの真剣な顔は何処へやらニツコリ笑いながらジルクが言った。

## 第十六話

「うわゝ。凄い人…。」

カノンとジルクと一緒に門を潜った先は街だった。

お祭りの時に出店が並んでいる様にここもたくさんの店が並んでいる。

しかもかなりの人がいる。

で、不思議なのが街の人々。

カノンを見るたび「おはようございますカノン様。」と声をかけてくる。

それに対してカノンは「おう。」とか適当に返してるんだけど…。

…解せぬ!!

なに？やっぱカノンって偉い人だったり？

いやナイって。

だってカノンだし。

うゝん。

やっぱり思い切って聞いちゃおうかなあ。

よし！聞いちゃおう！！

「ねえカノ……あれ？」

おかしいなあ？私の前を歩いていた赤頭がいらないんだけど？

ていうかあの人達いないと私何処にいけばいいのかも分かんないんだけどお。

これは……あれだね。うん。

「私……迷子だったり……？」

やばいでしょ。まじめに。

こんなに人が多いところではぐれたらまず会えないでしょ！

こ……この年で迷子になるとは思ってなかった……！！

「うあ……どうしよう……」

冷や汗タラタラでカノンとジルクを探す。

けどいない。

うつ……人酔いしそう……。

## 第十七話

―カノン side―

「相変わらず人が多いなここ。」

「まあ商店街ですしね。」

俺の呟きにジルクが答える。

人がわいわいしてんのは嫌いじゃねえけど多すぎんだろ…。

いつも迷いそうになんだよな…。

「なあ…ジルク。」

「なんでしよう？」

「さっき会った時からずって思ってたんだけどよ…。」

「？」

首を傾げるジルク。

聞くべきか聞かないべきかすげえ迷うなこれ。

でも聞かねえと後が物凄く怖え。

「仕事…どんくらいたまってる？」

「たっぷりです」

「…やっぱりか。」

「やっぱりです」

うぜえよ。

しゃーねえ。今日も逃げるか…。

「今日は逃げられませんよ。」

「人の心を読むな!!」

「失礼。いつも貴方様が仕事から逃げ出すので城の中にトラップを作らせて頂きました。まあこの国の資産で…ですがね。」

はあっ!?

「そんな下らねえ事に国の金使ってんじゃねえよ!!」

「致し方ありませんよ。どこかの誰かさんが仕事をやらずに逃げ出さなければ良い話でしたのに。」

「ねえヒナタさ…」

ヒナタに同意を求めようとしたジルクの表情が固まる。

「どうした?」



俺も後ろを振り返る。

「ヒナタ様が…いません」

ジルクの声が小さく響いた。

## 第十八話

ーヒナタsideー

…完全に迷いました。

困ったな…これ以上無い位に。

「どうしよう…」

目が涙目とか言わないで。お願い。

クイツ

「？」

制服のブレザーが引っ張られる感覚。

なんだろう…。

不思議に思い後ろを見ると…

「……………」

茶髪で短髪の可愛い女の子。

体系からして七歳くらいかなあ…？

そんな女の子が私のブレザーを掴んだまま私を見上げていた。

「どうしたの？」

どこかにお母さんがいるはずなんだけどなあ。

「えっぐ。」

ええええええええええええええええ。

どうしたの  
おおお！？

いきなり涙目にならないで。

やめてえええ。

私まで泣きたくなるから。

ただでさえ今涙腺緩んでるんだから。

でもさっきからお母さん来ないしまさか……

「迷子？」

コケンと頷く女の子。

やっぱり……。

大丈夫。お姉ちゃんも今迷子だから。

じゃなくて！！

「お使いなの…早く帰らなきゃいけないの…」

うるうる＋涙目＋上目使い

うつ…今絶対私100のダメージ受けた…。

殺人的な可愛さね…。

こんな子一人にしたら絶対さらわれる…

「帰んなきゃ…お城に帰んなきゃ…」

…はい？

「…お城？」

「あたしのお家。」

…マジですか。

## 第十九話

「」

今私と手をつないで歩いているのはさっきまで泣いていた女の子。

名前はアスカというらしい。

さっきから泣いてばかりであまりにもかわいそうだったので制服のポケットに入っていた飴玉をあげたらとたんにご機嫌になった。

……可愛い！

こんな妹が欲しかった……！！

一人っ子は寂しいんだよ……。

まあそんな事はどうでも良いんだけど……。

今適当に歩いてるんだけどお城には全然着かないし……

どうしよう……ホント。

困り果てていると……

「ヒナタ！」

……………。

「捜したぞ…。ってかなんだよその顔。」

「うわあああああ！カノン！！死ぬかと思った〜！！」

「はあ！？」

私の目の前にはカノン。捜して来てくれたらしい。

「カノン様だあ〜！」

「お！ アスカじゃねえか。久しぶりだな。」

タタタ…とカノンに駆け寄るアスカ。

そんなアスカを抱っこするカノン。

見ていると兄妹みたい。

ていうか…

「ねえねえ。」

「あ？」

「カノンってなんで『カノン様』って呼ばれてんの？」

ずっと聞きたかったんだけど迷子になったりで聞けなかった事。

「…あ〜。」

なんだか言いたくなさそうなカノン。

「カノン様はね王様なんだよ!!」

大きな声でそう言ったアスカ。

「あ…!コラ!」

なんか焦ったぽいカノン。

…王様?

王様ってあの…

『我に跪け!!』

どや顔のカノン

「変な想像してんじゃねえよ。」

パソコンという音と共に後頭部に衝撃。

「ぐべっ!」

「ちょ…今のマジで痛かった…。」

「しらんわ。」

「イラツク!!半笑いで言われた!!」

「うん。自分でもちよつとやり過ぎたと思った。」

「アンタぶつ殺ね。絶対ぶつ殺すかね!!」

叫ぶ私。笑うカノン。きよんとするアスカ。

「殺すのはちよつと…一応国王ですから」

ジルクが現れて少し控えめに言った。

「ジルク！」

「……。」

嫌そうなカノンと嬉しい私。

「バレちゃいましたか。では改めまして…」

「ドラグレイド第七代国王カノン様とその側近ジルクでございます。」

「…転職しようかな。」

につこり笑ったジルクの声と嫌そうなカノンの声が重なった。



## 第二十話

「お城〜!!」

「おお〜!でつかい〜!!」

「あんまデカイ声出すなよ...」

はしやぐアスカと私と呆れるカノン。

城のまわりには幾つか国旗みたいなものがかざってある。

その旗は全体的に赤で真ん中に龍が描かれている。

よくよく考えて見るとこの国は赤が多いなあ...。

住宅街みたいな所にあつた家の屋根も全部赤だったし。

国の色なのかな?

「ヒナタ様。」

「へ?」

ジルクが私に話しかける。

「アスカはこの城の侍女なのですが...」

「?」

頭の上に？を浮かべる私。

「簡単に言つとアスカはこっからは一緒に来れねえんだよ。」

あ、そうなんだ。

寂しいなあ。

寂しいと思つてるのは私だけじゃないらしくアスカも私の手を握る力を強める。

そして私の目をじーつと見る。

…う。

じーつ…

…うう。

じーつ…

うああああああ！！

「カノンの鬼いいい！！」

「意味分かんねえよ…。」

私の叫びに呆れるカノン。



## 第二十話（後書き）

はい。怜でございまーす

（ ´ ｀ ） ム

新キャラの説明をしまーす。

ゝジルクゝ

髪の毛 焦げ茶

髪の毛の長さ 短髪

瞳の色 茶

身長 180cm

ゝアスカゝ

髪の毛 赤茶

髪の毛の長さ 肩に着くくらい

瞳の色 オレンジ

身長 130cm

アスカの髪が茶の短髪って書いてありますが の様な感じです。  
いません。

うゝん：今作もおまけ書いた方が良いのかなあ。

まあいいです。

感想・誤字、脱字報告まってますゝ（＾o＾）／

## 第二十一話

「駄目だ!!」

「いいじゃない!カノンのケチ!!」

ただいまカノンと絶賛ケンカ中。

ケンカの内容はアスカを連れて行って良いか駄目か。

減るものでも無いし良いと思うんだけど…。

「ヒナタ様…アスカにはいつでも会えますし…引いて頂けると…。」

見かねたジルクが私に言う。

え…。

「つーことだ!ごめんなアスカ。」

前半は私に後半はアスカに向かって言うカノン。

「ううん。大丈夫。」

あゝ…癒される。

「うつし!んじゃ自分の部屋に戻るな?」

「あいつ!!」

元氣良く返事をするアスカ。

ほんと可愛い！

何回目か知らないけどとにかく可愛い！！

お城の中に入っていくアスカ。

しかし、くるつと振り返りタタタ…と私の方に駆け寄ってくる。

「どうしたの？」

「……。」

ジー…と私の顔を凝視しているかと思ったら。

ニパツと笑って言った。

「ヒナタお姉ちゃんありがとう！」

…うわぁ。

「ばいばい！！」

動けない私に手を振ってアスカはお城の中に入っていった。

「癒されるよなぁ～アスカ。」

ごもつともです。カノンさん。

「つかなんで固まってるんだ？」

……あんな可愛い顔であんな可愛い事言われたら固まるでしょ。

結局私の硬直が解けたのは少し経ってからだった。



## 第二十二話

…すごいな…うん。

私ヒナタはアスカと別れた後カノンとジルクに客間みたいな所に連れて来られた。

この客間がまたすごく豪華で例えば今私が座ってる椅子はすごくフカフカ。

それになんか高そうな壺とか絵とか飾ってあるし…。

…こういう時ってやっぱり大人しくしてた方が良いのかな？

……大人しくしてるってあんま好きじゃないんだよね。

………ちょっとくらい触ってもいいよね？

カノンもジルクもないから暇だし…。

そ…と壺に触る私。

「…コホン。」

「…うぎゃあ!？」

突然私の真後ろから咳払い。

立っていたのはジルク。

気配消して近づくの癖なのかな？

じゃなくて！！

「じっ…ごめんなさい！！」

ペコペコ謝る私。

「いえ、構いませんよ。」

ニツコリ笑うジルク。

よかった…

「たかが一億ノイズですからね。」

………は？

「ああ。ヒナタ様の世界では『円』でしたか。」

という事は…

「…これ一億円？」

これ…壺を指差して言う。

「ええ」

「…シツレイシマシタ。」

…土下座した方がいいかな？



ボタン！！という音と共にドアが勢い良く開く。

「カノン様…王族として正装をしてくださいと何度…」

現れたのはシャツに長ズボンとラフな格好をしたカノン。

けど腰には一本の剣を差している。

「いーんだよ！俺にはコレがあれば良い。」

コレ…剣をポンと叩きカノンが言う。

「カノン。それ何？」

「あゝ…家宝？」

「なんで疑問系なのよ…。」

「コホン。カノン様こちらに。」

「お、サンキュ。」

ジルクがどこからか椅子を出してきてカノンに言った。

「では…お話を始めましょうか。」

ジルクが笑って言った。

## 第二十四話

「あゝ…とりあえず俺の正体から言っとくか…」

「そうですね。」

うん。そこは私も知りたいよカノン。

「俺の正体は龍人族の一人。んでもってこの国を治めてる。」

「…龍人族？」

「龍人族…っ！のは人の姿にもなれるし龍の姿にもなれる一族の事だった。」

「…だった？」

「それも後で話す。…まあこの世界でも珍しい…んだな。多分。」

…曖昧…。口には出さないけど。

「んで次はこの国の事だ。あゝ…うん…国の事はジルクに聞いてくれ。」

それで良いのか国王！！

「…では私から。」

あれ？ジルク…胃押さえてる？

ストレス！？ストレスだよね！？

…苦労してるんだね。今度胃薬でもあげようかな…。

「国名はドラグレイド。言葉を喋る獣と獣人や…他にはヒナタ様と同じ人間などが住んでいます。」

「へ…。」

言葉を喋る獣か…会ってみたいなあ…。獣人も気になるけど。

「言葉はヒナタ様の世界と変わりありませんからご安心下さい。」

…よかった。

「お金ですがさっきも言いましたがドラグレイドのお金の呼び方は『ノイズ』他は何も変わりありません。」

そこまで言ってジルクはふと思い出したように続けて言った。

「あと、この城の中にあるお金ならいくら使っても構いませんから。」

は？

「ちょ…ちょっと待って！！」

「何でしょう？」

心底不思議そうに私を見るジルク。

「わ…私みたいなのに国のお金使っていいの!？」

嬉しいけど!!

「『みたいなの』など言わないで下さい。不可抗力とはいえ巻き込んでしまったのは我々ですから。」

「うだうだ言わないで受け取っておけて。」

ジルクに続いてカノンにも言われた…。

「じゃあ…お言葉に甘えて。」

ペコリと頭を下げてる。

「じゃあ…本題だ。」

カノンの言葉に顔をあげる。

「ヒナタ…お前が命を狙われてる訳は…隣国との戦争に関係してる。」

「…戦争?」

いつの間にか日は落ちていて赤い光が部屋を満たしていた。



## 第二十五話

「戦争と…私が…？」

「ああ。」

「隣国の名前はデルト。この国の北部にある国だ。」

「戦争…なんてあるの？」

私の問いに黙って頷くカノンとジルク。

「さっき言っただろ？俺の一族は龍にも人にもなれる一族だった。」

カノンが言う。

さつきから気になってた…。

『だった』ってなに…？

「…デルトの国王が俺に呪いをかけた。」

カノンが言うとジルクが俯く。

「呪い…？」

「ヒナタ…お前がいないと俺は龍の姿になれない。」

…私が？

「なんで私？」

「デルトの国王が俺にかけた呪いは二度と龍の姿になれなくなる呪いだ。」

はぁーとため息を吐くカノン。

「それはこの世界の誰にもとく事は出来ない。」

「でも…別世界から来たお前ならとく事が出来る。」

「ちよつと待つてよ！私カノンになにもしてないよ！？」

たまらず声をあげる。

けどカノンは真っ直ぐ私を見たまま言った。

「お前の存在自体が俺の呪いをといてるんだ。」

「存在…？」

もう意味分かんないんだけど…。

「まあ分かりやすく言えばヒナタ様の魔力のおかげですかね。」

ジルク。分かりやすすくないんですけど。

「生きるものなら誰でも魔力を持っています。それをコントロールし、扱える者と扱えない者の違いはありますが。」

「魔力をコントロールし、扱える者は…こんなふうに!!」

「うお!？」

「わわっ!？」

ジルクが言いながら手を振った瞬間部屋につむじ風が起きる。

ジルクの燕尾服みたいなスーツが風にパタパタと舞う。

風によって一枚の紙がジルクの所に辿り着く。

「魔法を扱う事が出来ます。」

それを取り、目を通してながらジルクが言った。

「お前なあ…!」

若干怒り口調でカノンが唸る。

「部屋の中で魔法使うなよ!!」

「おや? 加減もせずに最大級の魔法を使って部屋を一つ丸焦げにしたのはどなたでしたっけ？」

「それはっ…!」

「あなたでしょう。後この資料間違ってます。書き直して下さいね。」

「なにに！？」

ショックを受けているらしいカノン。

意外とガラスのハートね。

## 第二十六話

「…話が逸れました。」

コホンと咳払いをしてジルクが私に向き直る。

「まああんな風に魔法を使える者と使えないもので別れる様です。ヒナタ様は残念ながらまだ使えません…。」

やっぱり使えないかあ…。

「練習すれば使えるようになりますよ。」

ニツコリ笑うジルク。

今度頑張ってみよ。

「じゃあカノンの炎も…？」

「魔法ですね。」

本人はまた落ち込んでるけど。

「それでヒナタ様の魔力は別世界でも特別不思議な物なのです。」

「んでもってヒナタが放ってる魔力の傍にいと俺の呪いもとけるんだよ。」

あ、カノン復活した。

「ふん…。」

自分ではそんな自覚ないんだけどなあ…。

「で。当然デルトの奴らはお前が邪魔になる訳だ。」

確かに。私がいなかったらカノンは龍になれないもんね。

「それでお前を殺しに来たって訳だよ。」

なるほど…。すごい事に巻き込まれたな…私。

あれ？でもちよつと待つて。

「なんでカノンは私の世界にいたの？」

「あ…あれはジルクが…」

へ？ジルク？

「他の世界の事も学んで頂こうと思ひまして。それに別世界でも不思議な魔力を持った方と交流して頂こうかと。」

ジルク恐るべき。

「じゃあおじさんとおばさんとか家は？」

カノンのお父さんとお母さん。私がカノンの家に行くとよくお菓子くれたっけな。

「あいつらはただの侍女と執事。家は俺の魔法で作った幻影。」

…マジですか。

「ああ。後カノン。」

「んあ？」

「こつちにはちよくちよく来てたの？なんか国民のみんなと妙に仲良いし。」

「ああ。土日とかお前に会ってない時は大概こつちに居た。」

なるほど…。

## 第二十七話

「説明はこんなもんだな。」

うん。大体分かった。

私が頷くとカノンは続ける。

「これから戦争が始まる。戦争の最中は俺の近くにいてもらう事になる。」

そうだ…。戦争が始まるんだ。

「カノンは…人を殺すの…?」

小さい声だったけどカノンとジルクには聞こえたらしい。

二人共目を見開く。

そしてゆっくりとカノンが言った。

「ああ。」

「なんで…人殺しになりたい訳じゃないでしょ?」

「当たり前だ。…でもな。」



「奴らのせいで北部の街が一つ焼き払われた。」

…え？

「あいつらのせいで泣いた奴がこの国にたくさんいるんだ。家族…親友…恋人を失った奴らがな。」

「どうしても…どうしても許せねえんだ。」

いつも勝気な赤い目はなんだか寂しそうだっただ。

「あいつらには大事な物を失ったときの悲しみが分かんねえんだよ。」

「大切な物を失くした奴らが人を殺して手を汚す必要はねえ。」

「手を汚すのは…俺達だけで十分だ。」

カノンが言う『俺達』というのは国の人間の事かな。

「お前に手を汚せとは言わない。頼む。力を貸してくれ。」

赤い目が私を捕らえる。

…カノンは純粹にこの国を救いたいんだ。

なんでだろう。

力を貸してあげたい。

私が小さく頷くとカノンとジルクがほっとした顔になる。

「俺は…俺はデルトの国王を殺す。」

カノンの意志がこもった低い声。

けどその声を遮ったのは…

「お言葉ですが…」

意外にもジルクだった。

「なんだジルク。」

カノンがジルクに問う。

「よろしいのですか？デルトの国王はあなた様の…」

「ジルク……！」

ジルクが言葉を最後まで言う事は無かった。

カノンが怒鳴り声をあげる。

「その話は…しなくて良い…っ!!」

感情を押し殺したようなカノンの声。

「…失礼しました。」

「いや…悪い…」

カタンという音と共にカノンが椅子から立ち上がる。

そしてそのまま部屋を出て行ってしまった。

「申し訳ありませんヒナ様。」

「大丈夫。だけど…どうしたんだろう？」

長い間私はカノンが消えていったドアを眺めていた。

## 第二十八話

―カノンside―

「なに言ってんだ俺は…」

やっとヒナタが協力してくれるって言うてんのに…。

こんな屋上にいたって意味ねーよな…。

『よろしいのですか？デルトの国王はあなた様の…』

「…元側近って言いてーのかよ。ジルク。」

もう過ぎた事なのに…。

「忘れらんねーんだよなあ…。」

ああー…イライラする。

…街にでも行ってくるか。

思い立ったらすぐ行動！！

「さあーて…行くか。」

「お待ち下さい。」

「ぎゃあああ!?!」

背後から…ならジルクか！！

「なーんちゃって びっくりした？」

…ジルクかと思ったら違った。

「ヒナタかよ…。」

「『かよ』ってなによ！『かよ』って！-！」

てか…。

「お前声マネ出来たんだ…。」

「すごいでしょ。」

そうじゃねえだろ。

「で？なんの用だよ。」

「ん？別に。」

「嘘つけ。」

目が聞いたそうにしてんだよ。

お。ヒナタにしては珍しい。ちょっと困ってる。

「…昔話は好きじゃねえんだけどな。」

「…そう。」

…あー！もう！ー！そんなしょんぼりしてんじゃねー！！

「…分かったよ。一回しか話さねーかな。」

良い思い出じゃねーしな…。

## 第二十九話

ーヒナタ side ー

「…分かったよ。一回しか話さねーかな。」

やった！話してくれるんだ。

でも良い話じゃなさそうだね…。

「龍人族はもともと王の家系だったんだよ。」

王の家系…？

じゃあ…。

「カノンのお父さんとかも龍人族だったんだよね？」

「ああ。んで龍人族の家系は全員髪や瞳の色が赤なんだよ。まあ…異例もあつたけどな。」

染めてたんじゃなかったんだ…。

あ、でも小さい時からカノンの髪って赤だったっけ。

だから街の中でも赤色が多かったのかな。

「で、ドラグレイドは龍人族が支配していた。まあ簡単に言えば俺の先祖が支配していたんだな。」

ということとはカノンのひいじいちゃんとかかな。

「当然俺の親父も王になる。それで親父が若い頃に側近として傍に置いておいた奴がいたんだよ。」

側近…ジルクみたいな人かな。

「その側近の名前はバルド。親父の側近の頃はまだ15…だったか？」

若っ…!!

「その数年後に俺と兄貴が生まれたんだ。」

兄貴…？

「カノンってお兄さんいたの？」

「ああ。つってもさっき言った通り龍人族の中で異例な存在だったんだけどな。」

「異例？」

「兄貴は俺や親父と違って髪と瞳の色が青だったんだよ。」

へえ…。



### 第三十話

「話を戻すぞ。俺達兄弟の教育係としてバルドが選ばれたんだ。」

カノンの教育係か…大変そう。

「まあ…それなりに良い奴だった。」

そっぽ向いて言うカノン。

「でも変な事を報告した奴がいたんだよ。」

「変な事…？」

「『バルドが反乱を起こそうとしています。』ってジルクがな。」

「ジルクが…！？」

でも何で！？

「当時ジルクとバルドは親父の側近っていう立場を狙う者同士だったんだな。」

「国のみんなはバルドが親父の側近に選ばれたのを逆恨みしてんだってジルクを相手にしてなかったんだよ。」

そうなんだ…。

「でもジルクは親父からの信頼されてたからな。親父はジルクと相

談してもしもの事があつた時に対抗できる様に俺をお前のいた世界にとばしたんだ。いざと言うとき異世界の魔力を頼れる様にな。」

「ちょっと待って！カノンは生まれたときからあつちの世界にいたんじゃないの？」

私はずっと一緒にいた記憶しかないんだけど…。

「それにジルクが言つてた事と全然違うし…。」

「お前は覚えてねーかしんねーけど実際あつちの世界で暮らし始めたのは俺が5歳の時からだ」

「ジルクが言つてたのは表向きの理由だ。本当の話はこつちなんだよ。」

表向きって…。隠すことないじゃない。

「…ジルクが言つた事は本当だった。」

「じゃあ…。」

「俺が10歳の頃いなくなった時があつたら？」

確かにあつた…。お母さんも心配してたっけ。

「その時だったんだ。バルドが反乱を起こしたのは。」

「たまたまこつちの世界に戻ってきてな。」

でも…。

「カノンのお父さんはどうしたの？ 対抗したんでしょ？」

「殺された。」

「え…？」

「食事に毒を盛られてな。お袋もそれ食って死んだ。」

淡々と話すカノン。

そんな…。

「最期までバルドと戦ってたのは兄貴だったんだ。」

「兄貴は最期にバルドと刺し違えて死んだ。バルドもそれで死んだハズだったんだ…。」

「でも違った。」

遠い所を見て言うカノン。

「あいつは生きてた。そして今はデルトの国王だ。」

「そんなのって…」

報われな過ぎるよ…。

「…だからこの話は嫌なんだよな。」

「…ごめん」

「謝るなよ…。」

「もう…終わったんだ。」

風が吹き抜けた。

### 第三十話（後書き）

はい。

怜でございまーす（・・・）

カノンの過去が明らかになりましたねー！

もうガンガン進んで行こうと思います。

これからよろしく願いますm——（m

おまけ

火「なんか今回もおまけつくらしいぞ。」

日「へー。」

火「興味無さげだなお前（笑）」

日「いやー前作見てないからわかんないのよ。おまけってものが。」

火「確かになー…。」

日「あれ？なんかこんな所に手紙が…。」

『幼なじみは龍でしたの二人へ。

おまけでは適当に話していてくれ。

本当に適当でいいですから（笑）

例えば裏設定とかな。

私達裏設定なんて話してましたっけ？

忘れた。

…ですよ〜。

まあ他愛ない話でいいらしい。後は頼んだ。俺は寝るぞ。

ちよ…！先生寝ないで下さい！！ではお二人とも頑張ってください！！

狼&狐』

日「…だって。」

火「？」

日「一応アドバイスなんじゃない？」

火「裏設定か…。」

日「好きな物…とか？」

火「あー…俺？」

日「うん。」

火「唐辛子。」

日「…………マジ？」

火「マジ。」

日「えええええ…。」

狼と狐さんは誰か分かりますかね？（笑）

カノンは唐辛子が大好きな人です（笑）

まあばちばちやっていききたいと思います。



### 第三十一話

「????? side」

「カノン！逃げろ！！」

俺と正反対の長くて青い髪が揺れる。

兄貴…なんで剣なんか持ってたんだ？

その横で倒れてるのは親父と…お袋…？

兄貴の正面には短い黒髪。

バルド…なんでお前兄貴と戦ってたんだ？

「おや、カノン様。お帰りになられていたのですか？」

嫌な予感がしたから帰ってきたら…なんなんだよこれ…。

「失礼。」

目の前にはバルドの顔。

慌てて離れようとしてももう遅い。

「カノン！！」

兄貴の叫び声が聞こえる。

ガッと言つ音と共に視界が狭まる。

バルドに頭を掴まれていると分かったのは数秒経ってからだった。

バルドが俺の頭を掴んでいる手に力を入れると突然頭痛が始まった。

物理的なものじゃない。けど凄く痛い。

思わず悲鳴をあげる俺を見ながら笑ってるバルド。

なんで笑ってんだ…？

やめろ…頭が割れる…！！

バルドによって狭まれている視界の端っこに映ったのは青い髪。

「ぐっ…！？」

バルドが呻き声を出す。

何だ…？

狭まっている視界でも見えた。

バルドのわき腹に兄貴の剣が刺さっていた。

「カノンを…離せ！！」

兄貴の怒鳴り声が聞こえる。



## 第三十二話

―カノンside―

「っ!？」

目の前に広がるのはいつもの自分の部屋。

「…夢かよ」

前髪が頭に張り付いて気持ち悪い…

「くそっ…」

なんでいまさらこんな夢見るんだよ…。

こんなの見たら…寝る気になれねえし…。

時計に記されている時間は夜中の1時。

見張りしかいねえだろうけど…。

城内散歩してくるか…。

昼間はヒナタに邪魔されて街に行けなかったしな…。

「行くか…。」

適当に着替えて部屋から出る。

見張りの兵に見つかったら終わりだよなあ…。

「……………」

長い廊下を覗いてみる。

よし、誰もいない。

けどそれは間違いだった…。

「カノ〜ン!!」

「うをああっ!?!」

突然真後ろから名前を呼ばれる。

誰だ!!…大体分かってるけど。

「このお城大き過ぎる!!トイレどこ!?!」

ヒナタ…涙目で言うなよ…。

「っーか…」

「?」

「またお前か!」

「何がよー!!」

…やへ。見張りにばれる…。

### 第三十三話

ーヒナタsideー

またお前かつてそんな事言わなくてもいいじゃない…。

用意された部屋は高級ホテルの部屋みたいだったけど…

トイレが無かつたんだもん…！！

トイレ探してこれも用意されたパジャマのまま歩いてたら良いところにカノンがいたから…。

てかトイレえええ…！！

「カノン！トイレ…！！」

「俺はトイレじゃねえ…！！」

「カノン。やばい。漏れそう。」

真剣ですとも。はい。

「…はあ。そこ左に曲がつてすぐだよ。」

よく見ると左に曲がれるところがある。

ダッシュ…！！

こんなに走ったの久しぶりだなあ…。

バタンツ！とトイレの扉が思ったより大きな音が出た。



### 第三十四話

トイレから出てきた私を呆れた顔でカノンが見てた気がするけど無視で行きたいと思います。」

そういえば…

「カノンなんでこんな所にいるの？」

パジャマの私と違って部屋着っぽいし。

「…ちよつとな。」

…言いたくなさそうだね。

「ふん。そう。」

適当に返しておく。

部屋に帰って寝よ。

「ヒナタ…。」

部屋に帰ろうとした私を呼び止めるカノンの声。

「なに？」

「お前は…お前には…」

歯切れ悪そうにカノンが言う。

「俺は今どう見える?」

.....。

「どういう事?」

「... 龍に変身する化け物か、一国を統べる王か、それとも...」

「人殺しか。」

寂しそうにカノンが言った。

私は何も言わずにカノンに近寄った。

そしておもいきりカノンの頬を両手で挟んだ。

「うべっ!?!」

間抜けな声をあげるカノン。

私より背の高いカノンの顔に触るのはちょっと背伸びしなきゃいけないけどがんばる。

「この口は何言ってるのかなー?」

カノンの口をつまんで伸ばしてみる。

「うぐー!」

「確かに人を殺すのは良いこととは言えない。でも…」

「自分で自分の事化け物とか人殺しなんて言ったらお母さんとかお父さん泣くよー？」

「王とかってただの肩書きじゃん。カノンはカノンでしょー。」

「カノンはカノンのまんまだよ。今も昔も。」

横横縦縦丸書いてチョンしてカノン頬を離す。

「それに：カノンの力は人を殺すものじゃないでしょ？カノンの力は人を護るための力のハズだよ。」

きよんとした顔のカノン。

「おやすみ。」

そのカノンに手を振って私は部屋に戻った。

…これで良いんだよね。

### 第三十五話

「うーん…良く寝たああ…。」

あくびしながら伸びをする。

カーテンから漏れる朝日が眩しい。

「…よっしゃ！今日も一日頑張りますか！！」

気合を入れてまだ暖かい布団から私は抜け出した。

でもよく考えてみたら私の世界から持ってきた服って制服だけなんだよね。

制服って動きにくいんだよね…。

下着とかは侍女の人が用意してくれたけどパジャマ以外の服ってあるのかな？

…あつたら貸してもらおう。

制服に着替えてとりあえず部屋の外に出る。

すると…

「んまつ！！なんて格好してるのアンタ！！」

…無視。

「ちょっとそのアンタよ!!」

やっぱり?

説明させて頂きますと…

私の前にはオカ…

「ニューハーフよ!!」

「読まれた!?!」

…ニューハーフのお姉さんがいます。

でもすごくオシャレだなあ…。

「んふふ…そうでしょ?」

「…すいません。人の心読むの止めてもらえます?」

お願いします!!

「そ…ねえ…考えてあげる…じゃなくて。アンタ!!」

「?」

「ダサい!!」

ガン…

「オカマにダサいって言われた…」

ホント落ち込むわ…

「誰がオカマよ！！むつきー！！」

生むつきー初めて聞いた…。

ていうかこれ制服なんだからしょうがないじゃん…。

「んもう！アンタみたいの見てたら悲しくなってきたわ！！ついてらっしゃい！！」

「アタシの服あげるから！！」

「マジすか！？」

ガバツと顔をあげて聞く私。

「大マジよ！！」

「よっほーい！！お姉さま大好き！！」

「お姉さま…んふふ良い響きね…。ついてらっしゃい…」

私は服をくれると言うお姉さまについていった。

…単純と思った人、前に出なさい。

矢を一本ずつ打ち込んであげるから。

## 第三十六話

「ここが私の部屋よ!!」

「おお!!」

ニューハーフのお姉さまに連れられて来たのはとにかく服がいっぱいある部屋。

「アンタはそっねえ...」

「なんかリクエストある?それに合わせて選んであげるわ。」

最初はなんかごっそ服を見てたけど急にお姉さまが言った。

そっだな...。

「動きやすいので。」

あれ?なんかお姉さまが哀れむ様な目でこっち見てる!

なんで!?

「...もう良いわ。」

え...?泣いてる?お姉さま泣いてるうう!!?

「これなんかどうかしら?」



ひょいっとお姉さまが出したのは黒いスカートに白いシャツその上に赤茶のジャケット。

おお！確かに動きやすそう！！それにオシャレ！！（でもスカート…）

「お姉さまセンス良いいい！！」

「もっと褒めなさい！！」

「じゃなくて！ほら早く着なさい！！」

「はい…。」

お姉さまには一旦退室してもらって…（だってもとは男でしょ。）  
用意してもらった服を着る。

「お姉さまー！出来たよー！！」

ボタンとドアが開く。

「あら さすが私ね よく似合ってるわ。」

似合ってる頂きましたああああああ！！

「その服あげるわ。」

「マジ！？ひゃっほーい！！お姉さまマジ大好き！！」

「はいはい。ほら。アンタが着てたダサイ服。」

いつのまにか紙袋に入れられて差し出された制服。

「ありがと〜お姉さま〜。」

それを受け取った瞬間。

「ヒ…ヒナタ…いるなら返事しろ…。」

カノンの声。

でも声ちっさ…！

「カノン様〜ん…！」

お姉さまがボタン…！とドアを開けるとそこにはやっぱりカノン。

「げっ…！アンジェ…！」

思いつき『うえっ』て顔をするカノン。

お姉さまの名前アンジェって言うんだ…。

「カノン様〜ん。異世界来た子の服選んでおきましたあ〜。」

あれ？なんかお姉さまうねうね動いてない！？

ちょ…言っちゃ悪いけど気持ち悪い…。

青くなって口を押さえてたカノン。

でも急に手を離すと…

「ああ…ありがとな。アンジェ。」

出ましたー！！キラースマイル！！

カノンって顔は良いから凄いモテたんだよね。あっちの世界で。

「ほら。ヒナタ。飯食いに行くぞ。」

カノンに言われて気づいた。

私まだ朝ごはん食べてなかった…。

「お姉さまありが…」

…あちゃ…お姉さま別の世界に旅立つちゃてるよ…。

だって目がハートだもん。

背景がお花畑だもん。

「ねえカノン…あのまんまでいいの…？」

「その内戻ってくるだろ…。早く行くぞ。腹減った。」

カノンに連れられて私はアンジェお姉さまの部屋を後にした。



### 第三十七話

朝ご飯を食べ終わった私はカノンと一緒に雑談していた。

「あ、そうだ。」

ふとカノンが思い出したらしく言った。

「ヒナタ、ちょっと来てくれ。」

「うん。いいよ。」

断る必要もないのでカノンについていった。

カノンと一緒にご飯を食べていた部屋を出る。

どんどんカノンについて行くと長い階段。

「この階段何処に繋がってるの？」

私が聞くとすぐに答えが返ってくる。

「地下。」

…なんで地下？

それも聞こうとしたらもうカノンは階段を降りはじめていた。

「早!」

「ヒナター。早くしないと置いてくぞー。」

はいはい。今行きますよー。

カッン…カッン…。

私とカノンの足音が響く。

「…着いた。」

私とカノンの前には木製の大きな扉。

その扉をカノンが押すとギギーツと音をたててゆっくり開く。

「おおー！」

思わず歓声をあげる私。

扉の先には剣やら槍やら斧やら鎌まである。

言ってしまうえば武器の山。

武器は全部壁に飾ってある。

「もともとこれ全部親父のなんだけどな。」

へっ…。

私がちょこまか武器を見ているとカノンが奥の方からあるものを出

してきた。

「お前の専門はこれだよな。」

あるものはそう。弓と矢。

「おゝ！久しぶりの弓！！」

カノンが持ってきたのは竹で作られた軽いけど丈夫そうな弓。

「戦場で俺の近くに居るって事は十分お前も命狙われるからな…。自己防衛のために持つとけ。」

「分かった。」

私がカノンから弓矢を受け取った瞬間。

「カノン様！」

「「？」」

突然の声。

声の主はジルクで。

「どうしたんだよジルク。」

カノンが聞くとジルク言った。

「ガルベルの軍勢が進軍して来ました。」

え  
…  
?



### 第三十八話

「ガルの軍勢が進軍して来ました。」

え…？

「ガルム…ならあいつもいるか…。」

カノンが真剣な顔をして言った。

なんで…！？カノン達の敵はデルトだけじゃないの！？

「カノン様！ヒナタお姉ちゃん！」

突然聞こえた幼い声。

「アスカ！？」

タタタ…と階段を降りてくるアスカ。

お願いだから転ばないでよ…。

「あい！これ！！」

アスカがカノンに差し出したのは一通の手紙。

「…？」

私とカノンとジルクが手紙を覗く。

手紙にはこう書いてあった。

『カノンへ

よっ！俺様が遊びに来てやったぜ！！

さっさと出て来いよ！

今回も模擬戦で勝負だ！！

ま、俺が勝つに決まってるけどな。

早くしねーとこの城落としに兵進軍させっからなー。

降参するなら使いを俺んトコに来させろよ。

ヴォルトより  
『

……。

「模擬戦？」

「模擬戦です。」

私の呟きに答えるジルク。

「ていうかガラムとドラグレイドは同盟国同士ですね。」

ええええええええええ…

「でも進軍させるって…」

「ふざけ半分でしょう。」

軽！！

「誰が…」

手紙を広げた状態のままプルプル震えてるカノン。

「誰が降参なんてするかあああああああああ！！！」

叫ぶカノン。

ため息を吐くジルク。

目を丸くするアスカ。

「あんにやろう！ぶっ飛ばしてやる！！！」

ビリビリと手紙を破くカノン。

「ジルク！ヒナタ！！！」

「はっ。」

「なに？」

「俺達も進軍だ！ジルクは兵の用意をしろ！ヒナタは俺と一緒に来

い！弓忘れんなよ！！」

「御意。」

「分かった。」

「アス力は兵達のやるきをあげる！とりあえず笑って『いってらっしゃい』とでも言っとけ！」

「あい！」

おお。それは効果絶大！

### 第三十九話

「よし！みんな準備はいいかー！？」

『おおおおー！』

カノンが叫ぶと兵のみんなも叫ぶ。

私はカノンの横で突っ立ってます。

ガルのヴォルトって人から手紙が来てから30分。

30分でここまで用意出来るのは凄いな…。

カノンも戦闘服に着替えてる。

戦闘服って言っても黒い服に赤いコート。

でもコートには国旗と同じ龍の絵が描かれている。

『鎧とか着ないの？』って言ったら『重くて動けねえんだよ』だつて。

まあ確かに戦ってる最中に素早く動けないのはキツイよね…。

「カノン様からの司令だ！刃のついた剣は持つな！！」

ジルクが言う。ジルクも戦闘服なのか黒いコートを身に着けている。

「ねえねえカノン。」

「ん？」

「なんで刃のついた剣持たないの？」

「模擬戦だから…。死人を出す訳にはいかねんだよ。」

「そっか…。」

「にしても凄い人数。人多すぎるよ…。」

「気になるか？何人いるか。」

「察したのかカノンが私の聞く。」

「うん…まあ。」

「百万。」

「…マジ？」

「マジ。」

「うそーん。」

## 第四十話

百万の兵を引き連れたドラグレイドの兵は今国の門の前。  
門をくぐると私の目にあるものが飛び込んできた。

「あれは…！？」

「ガルムの兵だ。」

あるもの…それは大勢の兵。

ドラグレイドの兵にも負けないくらいの人数。

そしてその先頭には…

「…男の子？」

15、6くらい金髪短髪の少年。

そして側近だろうか？黒くて短い髪の男の人が傍にいる。

「ただのガキじゃねーぞ。ガルムの国王…ヴォルトだ。」

「あの子が！？」

「ああ。」

「カノンより年下の国王っているんだ…。」

「あいつが最年少の国王だ。」

「へ〜。」

国王って言うとなんかよぼよぼのお爺さんとか偉そうなおじさんが浮かんてくるんだけど…。

「で。あの黒い髪の男が側近のガイクですね。」

ジルクが言った。

やっぱり側近だったんだ…。

「うつし！んじゃ一発…。」

あれ？嫌な予感…。

スウ…と息を吸ってカノンが叫ぶ。

「ガルの国王ヴォルトに告ぐ！！この俺、ドラグレイドの国王カノンが一騎打ちを申し込む！！！！どうだ！！！！？」

ビリビリと鼓膜にカノンの声が響く。

「カノン様…。」

ジルクが呟く。

「毎度の如く勝手な事をしてくれますね。」



「てへっ」

誤魔化すカノン。

状況が悪化してる様に思えるのは私だけ？

「夕飯抜きです。」

「うそーん。」

カノンが悪い。

## 第四十話（後書き）

はい。怜です。。

新キャラ登場ですね。。

まだ実際は登場してませんけど（笑）

もう四十話か…。まだ続きそうだなあ…。

くおまけく

カ「おまけだな。」

ヒ「おまけだね。」

ヒ「あれ？前のおまけとちょっと違ってない？」

カ「あゝ…」

カ「この部分な。」

ヒ「前は火と日だったじゃん。」

カ「…作者の都合。」

ヒ「適当（笑）」

カ「んな事どうでもいい！」

ヒ「はいはい。新キャラのヴォルトってどんな子？」

カ「んゝ…。」

カ「チビ。」

ヒ「ちょｗｗ」

？「誰がチビだゴルァ！！」

カ「お？」

ヒ「？」

作者「次回に続く！！」

カ&amp;mp・ヒ&amp;mp・？「おい！！」



## 第四十一話

ーヴォルトsideー

「ガラムの国王ヴォルトに告ぐ！…この俺、ドラグレイドの国王カノンが一騎打ちを申し込む！…どうだ！…？」

うおー…。

相変わらず声でけえなカノンの奴…。

これは…受けて立つしかないだろ…。

できるだけ息を吸い込んで俺も叫ぶ。

「その一騎打ち乗っ…！」

「お待ち下さい。」

なんだよ！！

「なんだよガイク…。」

言いたい事は分かるけどよー…。

「何を勝手にお決めになっているのです。」

やっぱりな…。

「だってよぉー…。」

「だってもなにもありません。」

言い切りやがった…。

「あなた様は毎度毎度…」

出た説教…。

「そのお年ですからお気持ちは分かります。ですが…」

「なあガイク。」

「はい？」

首を傾げるガイク。

「お前そんな説教で俺を止められると思ってんのか？」

「…もうお好きになさって下さい。」

よっしゃあ！勝った！

今度こそ叫ぶ。

「こちらガルム国の王ヴォルト！！！！その一騎打ち乗ったあ！！！！」

あ、そうだ。

「ガイクあとの事は頼んだZ E」

「残念ですね。今日の夕飯あなた様の好きなメニューでしたのに。」

「…は？」

「夕飯抜きです。」

「うそーん」

## 第四十二話

「ヒナタ side」

「…なんかもめてるっばいけど。」

「ほっとけ。」

私の言葉に即答するカノン。

「こちらガルム国の王ヴォルト！…！その一騎打ち乗ったあ！…！」

突然響いた声。

カノンもそうだけどこの距離で声が響くってすごいな…。

「うっし！じゃあジルク！あと頼んだ！」

「はっ。」

「ヒナタ！無理はすんなよ！」

「うん！」

分かってる。模擬戦って言うてもここは戦場。

狙われる可能性だって充分ある。

「「勝負だ！！！！」」



カノンとヴォルトって子の声が響く。

その瞬間カノンの姿が龍に変わる。

カノンの赤い羽根が広がる。

「グオオオオ！！！」

カノンが雄叫びをあげると共にドラグレイドの兵が進軍する。

カノンが羽ばたいた。

凄い風に吹き飛ばされそうになるけど耐える。

多分この模擬戦は勝てる。

龍のカノンがいるから。

普通の人間じゃ太刀打ちできないはず。

でもそれは間違いだった。

「ガアアアア！！！」

カノンのとは違うもう一つの雄叫び。

「なに！？」

バツとガルムの兵を見ると…

「虎…！？」

ガルの軍勢の方から凄い速さで走ってくる一匹の虎。

それに続く様に兵たちも進んでくる。

虎の金色の目で分かった。

あの虎はさっきの男の子…ヴォルトだ。

ヴォルトはカノンの方に一直線に走ってくる。

カノンもヴォルトの方に一直線に飛ぶ。

龍と虎が闘いを始めた。

## 第四十三話

「ガアアアア！！」

「グオオオオ！！」

遠目に見たカノンとヴォルトの闘いは激しかった。

カノンが尻尾でヴォルトをなぎ払おうとするとヴォルトはそれを避けてカノンに噛み付こうとする。けどカノンが飛んで距離を取る。

「ガルルルルル！！」

一定の距離を保った両者が唸る。

「ガアッ！！」

ボオッ！とカノンが炎を吐く。

ヴォルトが炎に包まれる。

ちょ…！やばいんじゃない！！

私がハラハラしながら炎の中を見ていると…

「ガアアアアア！！」

「なっ…！？」



## 第四十四話

「てんめえ！カノン！！炎使うなんて反則だろうが！！」

「それを言うならお前だって反則だろうが！！」

ギヤーギヤー言い合う二人。

ヴォルトは身体中に軽い火傷の後がありカノンは右肩を押さえている。

似た者同士ね…。

「決着つけてやるよ！！」

「こっちのセリフだ！来いよヴォルト！！」

それぞれ腰に差していた剣を抜いて構える。

「オラアアアア！！！！」

ギインツ！と金属がぶつかる音がする。

火花が散る。

「わ…すごい…」

カノンとヴォルトの闘いは人の姿になっても激しかった。

「おおおっ！！」

バチバチツとヴォルトの剣が電流を帯びる。

そしてそのままカノンへ振り下ろされる。

「させるかよっ！！」

今度はカノンの剣がボオツと炎を帯びる。

カノンの炎とヴォルトの電流がぶつかり合い相殺される。

ブワツと砂煙があがる。

「どうなったのかな…？」

「ヒナタ様。」

私が夢中でカノンとヴォルトの闘いを見ているとジルクから声をかけられた。

「どうしたのジルク？」

「私が目配せをしたらヴォルト様に向かって矢を打って下さい。」

「…は？」

…それは私にあの子を殺せと？

両軍とも兵は刃のついた剣は持っていないけど、カノンやジルクは

刃のついた剣を持っている。

それに私だって危険な矢を持っている。

充分人を殺せる。

「あ、違いますよ？威嚇程度に足元にでも打って下さい。それだけでいいんです。」

びびっくりした…！

まあ…それだけなら…。

「で…出来ることはやりたいけど…。」

「ありがとうございます。では。」

ジルクが手を振ると風が起きて風が止んだときには彼の姿は無かった。

## 第四十五話

―カノン side―

くっそ…。砂煙でヴォルトが見えねえ…。

でもそれはヴォルトも同じはずだ…。

いや…待てよ…？

この状況で後ろを取られたら…。

考えたら冷や汗が背中を伝った。

…どうするよ。

ジャリ…

「！」

地面を踏む音に気づいた瞬間に響く声。

「もらったああああ！！」

後ろには剣を振り上げるヴォルト。

やっべえ…！

けど…



「負けるかよッ!!」

出来る限りのスピードで剣の突きを放つ。

でもヴォルトに当たる事は無かった。

首筋に刃の冷たい感触。

「なっ…!？」

思わず手を止める。

「…大人しくしててもらえますかね？」

横を見るとヴォルトの側近のガイク。

俺の首筋にはそいつの剣。

「…マジかよ。」

ヴォルトの声。

ていうか俺って斬られてもおかしくない立場のハズなんですけど。

「まったく…やはりこうなっていましたか。」

ヴォルトの首筋には俺と同じ様に剣。

しかもその剣の持ち主は…

「ジルク…邪魔しに来たのかよ…。」

「なに言ってるんですか。あなた結構ピンチだったでしょう。」

俺の側近。

どっすっかな…。

## 第四十六話

―ヒナタ side―

やっと砂煙がはれてきた…。

そう思いながらカノン達が闘っていた場所を見つめていると…

だんだん四つの人影が見えてくる。

…何だろう？

よく目をこらすと見覚えのある赤い髪と金の髪。

そしてその後ろには黒い髪と茶色の髪。

完全に砂煙がはれた時私が見た光景は…

カノンがヴォルトの側近に刃を突き立てられていて、ヴォルトがカノンの側近…ジルクに刃を突き立てられていた。

これってかなりヤバいんじゃない？…。

「…我が主から手を離して頂こうか。」

ヴォルトの側近…ガイクが言った。

その表情は険しい。

「それは出来ません。私も自分の主が心配ですからね。」

微笑を浮かべながらもジルクが言った。

でもその眼は真剣そのもの。

「…このまま固まっけていても仕方ありません。そして貴方は私の主からその手を引く事になる。」

相変わらず表情を崩さずにジルクが言う。

「…?」

ガイクが不審そうにジルクを見る。

そしてその時…

私の方を横目で見たジルクが私に向かってウィンクをしたように見えた。

……。

…これは打って事でしょいかジルクさん。

うん。もったいいや。打とう。

私は持っていた弓を構え…

矢を放った。



## 第四十七話

私の放った矢は真っ直ぐヴォルトの方へ飛んでいった。

「どわっ!？」

ストン!と言う音をたてて矢はヴォルトの足元に刺さった。

あ…当たなくてよかった…!!

いきなり飛んできた矢にみんなびっくりしている。

まあ、当たり前だけど…。

「どうします?」

につこり笑ってジルクが言う。

苦虫を噛み潰した様な顔をするガイク。

「「悪魔だ…。」」

カノンとヴォルトが同時に言う。

ちなみに私もちょっとだけ思った…。

「なにか?」

ジルクが笑いながら言う。

あ、ヤバイ。眼が笑ってない。

遠目にも分かるくらいにカノンとヴォルトが震えてた。

## 第四十八話

「…申し訳ありません。ヴォルト様…。」

スッ…とカノンの首筋から剣が退く。

「ドラグレイド、ガルムの両軍に告ぐ！！今回の模擬戦はドラグレイドの勝利とする！！！」

『オオオオオオ！！！！』

ジルクが叫ぶと共にドラグレイドの兵から雄叫びがあがる。

「だあああ！くっそおお！！！」

ヴォルトが悔しそうに言う。

「チエツ。俺とヴォルトの決着つけたかったのによー。」

「馬鹿言わないで下さい。どちらもボロボロになって終わりますよ。」

ムスツとしながら言うカノンをジルクがたしなめる。

「申し訳ありません。ヴォルト様。」

もう一度ヴォルトに言うガイク。

「しょうがねえよ。今度は勝ってやるから安心しろ！」



「…まったく、貴方様は…。」

笑って言うヴォルトに苦笑いするガイク。

「そう言えばどんな弓使いなんだ？これ打ったの。」

地面に刺さっていた矢を抜いてカノンに問うヴォルト。

「ん…。」

チラッとこちらを見るカノン。

な…なにか用でしょうか…？

でもすぐに視線を外してヴォルトにニッと笑って言った。

「今まで俺が会った中で一番の弓使いだ！」

## 第四十九話

「うっしー！じゃあみんな帰っていいぞー！！」

ヴォルトの言葉にそろそろと撤退するガルム軍。

「大丈夫なのかよ…あれ…。」

引きつった顔で言うカノン。

「おー。よく出来た奴らでさ、指示だけすれば俺がいなくても国に帰れるんだよ。」

「すげーなあー。」

カノンが感嘆の眼で去っていくガルムの兵を見てみると、明らかに落ち込んだ顔をしているドラグレイドの兵。

カノン…！気付いてあげて…！

「ってわー！嘘！ごめん！ウチの兵もあんだだけであれば俺が楽できるとか思ってたねえから…！」

早口で言い訳をするカノン。

ってか最早言い訳じゃないよね。

ほら！さらに落ち込んでる…！

「ヴォルトオ…」

困り果てた顔でヴォルトに助けを求めるカノン。

「お前も黙ったら？」

ごもつとも。

「よく言っぜチビのくせに…」

「ああ？良いんだよこれから伸びんだから。」

おもわぬカウンターを喰らったヴォルトは青筋をたてながら言う。

「お二人とも、お城に行きましょう。」

ナイス！ジルクー！！

私もカノン達の所に行こう。

……………そう思ったのに。

「はぐれたあああああああ！！」

なんなのよ…。嫌がらせ？

門に入っていくカノン達を見たんだけど、例の人が多すぎる商店街ではぐれた…。

「はあ…もうヤダ…。」

あはは…今私完璧自暴自棄って奴だ…。

「なあ。そのアンタ弓使いか？」

「いちおうそうですねー。なんですかー？」

誰かに話しかけられたけど顔も見ないで言っちゃた。まあいいよね。

「名前は？」

「もううるさいな…。ヒナタ！ヒナタだよ！」

少しムツとして吐き捨てる様に言ってその人の顔を見た私は青ざめる。

「お！じゃあやっぱアンタか！当たり前」

笑ったのはガルムの国王…ヴォルトだった。

## 第五十話

「えゝと。」

落ち着け私！！

「んお？」

ヴォルトが首を傾げる。

んお？って…。

「…ガルの…ヴォルト？」

「おっ！知ってんだな！」

ニカツと笑うヴォルト。

「…本物？」

「いででででー！！」

びょーんとヴォルトの両頬を引っ張ってみる。

いや、だって偽物かもしれないじゃん！！

「…イテーんだけど。」

本物だった。

「じつ…ごめん！」

パツと手を離すとさすさと頬を擦るヴォルト。

ちよつと涙目。うん、ごめん。

「なあ、カノンから聞いたんだけどよ。」

「へ？」

突然ヴォルトに言われてまぬけな声が出る。

「お前が狙ったんだよな！？あの位置から！俺を！」

ずいっと顔を近づけながら言うヴォルト。

ち…近い…。

「え…あ…うん。」

「すげーな！軽く100mはあったんじゃないか！？」

ヴォルトの目がキラキラ輝いてる。

身長も私より大きいから信じにくかったけど…こういう所見ると15歳つてのも頷ける。

「ふふ…。」

「なっ…何すんだよ!!」

何って…。

「頭撫でてみました。」

「そうじゃねえだろ!」

真っ赤になるヴォルト。

「かぁゝわいいゝ」

「うつせー!!」

真っ赤になったヴォルトが可愛かった。

## 第五十話（後書き）

あっというまに五十話！！

早いですなあ。。

あ。ヴォルトとガイクの設定書いときます。

ヴォルト

髪の色 金

瞳の色 金

身長 165cm

髪形 短髪

ガイク

髪の色 黒

瞳の色 茶

髪型 短髪



…くらいかな？

質問あったら感想にくださいーい（・・）

おまけ

ヴ「まったく！前は作者に邪魔されたぜ！」

カ「しゃーねーだろ？まだ登場してなかったんだから。」

ヴ「そうだけだよお…」

ヴ「で…。カノンよお…」

カ「あ？」

ヴ「チビって言ったよな…？俺の事…」



ヒナタのハリセンは最強です（笑）

感想・アドバイス待ってます（・・）

## 第五十一話

「ジルク side」

何時も人が多い商店街。

そんな中人々の話声が聞こえる。

「おい見ろよ。ジルク様だ。」

「ホントだ…なにかあったのかな？」

…自分の話題らしい。

というか…ヒナタ様…また迷子ですか…。

はあ…と自分の口からため息が出る。

確かにここは人が多く迷いやすいですが…。

異世界の方は方向オンチなのでしょうが？

カノン様達と手分けして捜し始めて30分。

まだ見つからないとは…。

置いていってしまった我々も悪いんですね…。

「…ん？」

人混みの中見慣れた赤い髪が覗く。

思った通り、赤い髪を持ち主は自分の主人で。

その主人の目線は仲が良さそうな金髪の少年と黒髪の少女に釘付け。

……お若いですね…。

「嫉妬…ですか？カノン様。」

「うおあつ！？」

声をかけるとビクツと肩を揺らす主人。

だが次の瞬間には真っ赤になって今私が言った事を否定する。

「そ、そんなんじゃないし！！」

「カノン様お若い。」

「うつせえ！！」

クスツと笑いながらからかうと怒鳴る我が主人。

「まったく！早くヒナタとヴォルト連れて城に行くぞ！！」

「御意。」

さて…想いは実るのでしょうかね…？

まあ、本人自身まだ気付いていないでしょうね。

嗚呼、おもしろい。

## 第五十二話

「ヒナタ side」

「ヒナタ！」

ヴォルトをからかっていると聞きなれた声。

「カノン！」

やってきたのは思ったとおりカノン。

その後ろにはなにか面白そうな顔をしたジルク。

「…なにかあったのかな？」

微妙になんかカノン怒ってるし…。

「……ほほう。」

ヴォルトが私の横でニヤリと笑う。

「どうしたの？」

「べえ〜つにい〜？」

カノンの方を見てニヤニヤ笑うヴォルト。

「…なんだよ。」

不機嫌そうにカノンが言い放つ。

「いや？良いんじゃないの？お似合いお似合い。なあ、カノンの側近さんよお。」

「はっ。ですがお二人共気付くかどうか…。」

渋い顔でジルクが言う。

「あゝ…そうだな。特に女の方鈍そうだしな。」

うんうん。と頷きながらヴォルトが言う。

…どういつ事？

カノンもなんか複雑そうな顔してるし…。

私が首を傾げているとヴォルトが言った。

「あ！ガイク捜してこねえと！」

「ここに。」

「お！早いな！」

ガイクが人ごみの中から現れて一礼する。

「早く行こうぜ。また迷うのは嫌だからな。」



カノンが相変わらず微妙な顔をしながら言った。

その言葉に私達はまた歩き出した。

## 第五十三話

場所は変わってまたカノンのお城。

最初私が案内された部屋にみんなで入る。

客室みたいなものかな…？

そして相変わらずフカフカなソファーに座る。

「で？ヴォルト、お前が来たって事はなんかあったんだろ？」

カノンがヴォルトに問う。

「…ああ。デルトの連中が動き出した。」

「！」

『デルト』という言葉に目が険しくなるカノン。

「…なにかやらかしたのですか？」

カノンを尻目にジルクが言う。

「…この間」

「この国で数人行方不明になっただろ？」

…行方不明？

「ああ。確かに、男3人と女2人行方不明だ。」

「は…やっぱりか…。」

カノンが言っているとヴォルトがはあ…とため息を吐く。

「ガラムでも何人か行方不明になってんだよ。しかも目撃者によると…」

「服にデルトの紋章が描かれていた…そうだ。」

「…決まりだな。」

カノンの少し怒りがこもった声。

「どうするよ。カノン。」

「ここは様子を見るべきでは…。」

「貴方様の決断1つです。」

上からヴォルト、ジルク、ガイクの順番。

「…奴らは俺達が動かないから油断している。」

カノンが静かに呟く。

「もう我慢の限界だ。」

髪の毛から覗く怒った様な赤い瞳。

「奴らを潰す。」

その眼が…少しだけ怖かった。

## 第五十四話

「奴らを潰す。」

「異論は認めない。」

カノンが続けて言うと言いつても誰も黙る。

「いいね。」

ポンツと椅子の肘掛を叩いたのはヴォルト。

「その言葉を待ってたぜ。」

ニカツと笑って言った。

「ドラグレイドだけじゃデルトには敵わない。ガルムも参戦する。」

何回かまばたきをするカノン。

「いいのか？」

「当たり前だろ。デルトの兵は二百三十万。組んだほうがまだ勝機がある。」

「だろ？ ガイク。」

「はっ。」

ヴォルトがガイクの言葉に満足そうに笑う。

「というか二百三十万って…もう想像できないな…。」

「ウチの兵を呼ぶとしたら何日かかるんだ…？」

「待つとしても一ヶ月半…それ以上は無理だ。」

上からヴォルト、カノンの順番。

「いかなさいますか？」

うーんと唸っていたカノンが顔を上げる。

「決めた。」

「『？』」

私を含めこの場の全員がカノンの言葉に耳を傾ける。

「本日より一カ月後。ドラグレイド・ガラム両軍はデルトに攻撃を開始する。」

「戦争だ。」

カノンが言い放った。

## 第五十五話

話し合いが行われた日の夜…。

ヴォルト達はここにしばらくの間泊まるらしい。

まあ私は大勢の方が好きだから良いんだけど…。

…それよりカノンの様子がおかしい様な…。

まあ勘でしかないんだけどね。

与えられた自室でうぐんと唸っているとコンコンと言うノック音。

「はい？」

「私私い！アンジエよー！！」

あ、お姉さまだ。

「アスカもいるわよー！！」

「ヒナタお姉ちゃん。」

マジですか。早く鍵開けないと…。

「待っててね。」

鍵を開けた途端に転がり込むようにして部屋の中に入ってきたのは

アスカ。

「お姉ちゃん!!」

「アスカ!」

ああ、癒し…。

「仲良いのねアンタ達…。」

お姉さまが珍しそうに私とアスカを見る。

「アスカがなつくなんてカノン様くらいよ。」

え、なんか嬉しい…。

「アスカ!」

頬擦りしてみる。

「えへへ…」

あー!もう可愛い可愛い可愛いー!!

「アンタ幸せそうねえ…」

悩み無さそう…とお姉さまが呟く。

そんな事…



「そんな事、無いよ…。」

アスカが不安そうに私を見上げる。

「…なに？話聞いわよ。」

空気が変わったのを察したのかお姉さまが言った。

「実は…」

私はカノンの事を話す事にした。

## 第五十六話

私は話した。

カノンの様子がおかしい事。

それと…

まだ私が戦争に関与している事の自覚がない事。

私は…普通に過ごしていただけ。

ごく普通の学校で、

ごく普通の生徒で、

ごく普通の人間だったのに。

何故か、命を狙われて、

何故か、こんな世界に呼ばれて。

なにが…なんだか…

分からなくなった。

自分が何を信じたら良いのか分からなくなった。

そんな私が人の命を奪って良い訳無い。

「…本当に、何なんだろうね。」

「二人に話しても…しょうがないのにね。」

黙って聞いてたお姉さま…アンジェが立ち上がった。

「この…お馬鹿!」

ベチツという音とおでこに衝撃。

「いったあ!!」

思わず涙目になりながらおでこを押さえると仁王立ちしたアンジェがいた。

「アンタが信じるものなんて一つでしょうが。」

「それにその信じてる物が迷ってるなら一緒に考えてあげるモンでしょーが。」

ポカンという表現が今の私にはすごく似合っんだと思う。

「ほら!早く行きなさいよ!」

「ど、何処に!?!」

「この城の屋上!?!」

「あるの!?!」

「あるわよー!!」

アンジエに押し出され私は部屋を出た。

なによー…。

口を尖らせながら屋上に向かう。

「ヒナタお姉ちゃんどうしたのー?」

「んふふ…乙女の悩みよ。」

アスカとアンジエがこんな会話しているのを知らずに…。

## 第五十七話

屋上に続く階段を駆け上がる。

バンツとドアを開けると…

カノンがいた。

「…カノン。」

「…ああ。ヒナタか。」

ちらつとこちらを見るカノン。

コンクリートの床を歩きながらカノンの近くに立つ。

「うわぁ…」

屋上からは街が一望できた。

なんだかとても景色が綺麗だった。

「綺麗だね…」

「ああ。ここが一番落ち着く。」

少し笑うカノン。

「なあ、ヒナタ。」

「ん？」

「お前はさ……」

「自分の兄貴みたいなモン殺そうとしている奴みたら……どうする？」

……きつとそれは

「カノン？」

「俺がやろうとしてる事はあつてるハズなのに……」

バルドの事だ……。

「自分の兄貴みたいな奴だった人物と国の国民……どっちが大事か分かってんだけどなあ……」

あーと空を見上げるカノン。

「……俺、決めたわ。」

「？」

「もう振り返んねえ。俺はバルドを殺す。」

「お前が証人な。」

無理に笑うカノン。

「それで…」

「それで…本当に良いのかな？」

カノンが目を見開いてこっちを見る。

「…お前さKY？」

「そ…そんなんじゃないし!!」

だって…

「私も…分かんないよ。」

「…だよなあ…。」

空が綺麗に青かった。

## 第五十八話

一ヶ月は早かった。

あつと言う間にその日はやって来た。

ホントは来てほしくなかった。

まだ決心してないのに…。

「……………」

ガルムの兵もドラグレイドに全員着いている。

後はカノンの号令だけらしい。

「ヒナタ様…」

「ジルク…」

外に行こうと廊下を歩いていたら私に戦闘服の黒いコートを身に着けたジルクが近づく。

「なんか…もう分かんないや…」

「カノンがバルドを殺すって言った時店辛そうな顔してた…。…バルドとカノンは仲良かったの？」

「…ええ。良いなんてほどではなく…。…」



「そっか…。」

なら…やっぱり…

知らない間に弓を握り締めていた。

「間違ってるよ…カノン。」

「何やってんだ？ヒナタ、ジルク。」

後ろから聞こえる声。

カノンだ。

赤いコートが赤い髪と似合う。

「カノン…私考えた…。」

けど…

「けどやっぱりこの道しか無いの？」

「…今さら…何言ってるんだ？」

カノンが少し怒った口調で言った。

「でもやっぱり間違ってる…」

「お前は…！」

私の声を遮る怒声。

「…あれを見てないから…。」

カノンが俯いて言った。

…『あれ』？

「ヒナタ…お前を連れてきたのはこっちだ…けど」

「やっぱりお前は…城に残ってる。」

「え…？」

「元々無理やり連れてきたに近いんだ。」

待つてよ…。

「戦争に参加させるなんて俺達の我儘だ…。」

カノン…

「悪い…。」

なんで…

「ジルク！行くぞ…！」

「待つて…カノン…！」

「カノン様!!」

叫んでも…届かない。

カノンは私とジルクを置いて行ってしまった。

「…なんで」

なんで…今更…

「申し訳ありません…ヒナタ様…。」

「カノン様はご家族を目の前でバルドに殺されたのです…。」

そうだった…

なら…私は…

「酷いこと…言った…。」

「…カノン様ならお気になりませんよ。」

「行つて参ります。」

一礼してジルクもカノンの後を追った。

私は…

ただただ立ちすくむ事しか出来なかった。



## 第五十九話

「カノン side」

これで…良いんだ…。

「…カノン様。」

「ジルク。」

「よろしいのですか？」

廊下を歩きながらジルクに問われる。

「…ああ。」

もう決めたんだ。

「ヒナタを巻き込む訳にはいかねえしな…。」

「これは…俺達の闘いだ。」

「はっ！」

頭を下げるジルクを横目に兵が待つ外へ出る。

外に出ると兵達とヴォルトやガイクもいた。

そして俺は二万の兵に命じた。

「誇り高き兵よ！！みんなもデルトの悪行を知っているだろう！！  
もう我慢の限界だ！！今こそ！！」

「今こそ我等の力を見せつける時だ！！奮闘せよ！！！！」

『オオオオオオ！！！！』

俺の言葉に応えてくれる兵達。

こいつらを裏切る訳にはいかない。

「似合わねえ。」

「うっせ。」

一番頼りがいのある……ヴォルトと拳を合わせた。

お互い生きて帰れる様に。

## 第六十話

「……………」

「ヒナタお姉ちゃん。」

「……………」

「ヒナタお姉ちゃん。」

「……どしたの？アスカ。」

パアツと表情が明るくなるアスカに少し罪悪感。

無視してごめんね。

「元気無いね。飴食べる？」

アスカの小さい手には飴玉。

「……そうだね。一つもらおうかな。」

「あいつ！」

手渡される飴。

口に入れると甘い味が広がる。

ちなみにイチゴ味。

口の中でコロコロ飴を転がしているとアスカが膝によじ登ってくる。

そして膝に乗るとほっと一息。

「ヒナタお姉ちゃん。」

「んー？」

「カノン様の事心配なの？」

心配…かあ…。

「うん…。」

「だから元気無いの？」

「……。」

心配だし…それに…。

「お姉ちゃん？」

「カノンに酷い事言っちゃったんだ…。」

あー…私の馬鹿…。

アスカに言っただってなんにもなんないじゃん。

「なら謝ればいいんだよ！」



返ってきたのは予想外の言葉。

「アスカもね、悪い事したら謝るよ!」

…あ、私本当に馬鹿だ。

アスカだって出来ることなのに。

気付いたら私は微笑ってた。

「そうだね…謝ったらいいのか!」

ぎゅうつとアスカを抱きしめてみる。

本人はキャツキャと笑っている。

一番に謝るから…

だから…

早く帰ってきてよね。

## 第六十話（後書き）

はい。

六十話でした！

いやゝゝゝヒナタとカノン急接近すな。

ふうゝ

えゝ六十一話からしばらくはカノン視点になりそうです。

ではでは。。

あゝすみませんが今日はおまけはお休みです。すいません。。

## 第六十一話

―カノン side―

戦場独特の銃弾の音と血の匂い。

これに慣れたのはいくつ頃だっけなあ…。

「うわああああ!!」

やけくそになって突撃してきたこのエリア最後の敵兵を叩き斬る。

「カノンこっちは終わった…って怖!!」

返り血を浴びた俺の顔を見てバイクを連れたヴォルトが言った。

余計なお世話だ。

「うつせえ。」

「カノン様、このエリアの制圧は終わりました。」

俺がヴォルトに言い放つと同時にジルクが言った。

確かに木も草もなにも生えていない荒野で立っているのはドラグレイドとガルムの兵だけだ。

「うし!じゃあ残ってんのは…城だけか。」

商店街や住宅がある街に囲まれた城。

あそこにバルドがいる。

「みんな聞け！！街の住人は攻撃するな！！向かってくる敵兵だけ倒せ！！！」

「後は城だけだ！！みんな頑張ってくれ！！！」

『オオオオオ！！！！』

応えてくれる兵もかなり減った。

散っていった奴らのためにも勝たなきゃいけない。

「突撃！！！！」

俺の声が荒野に響いた。

## 第六十二話

ギンツ！！

街の中で金属と金属がぶつかり合う音が響く。

「どけえええ！！！！」

相手の剣を弾き、切り伏せる。

「ぎゃあっ！！」

相手は短い悲鳴をあげて倒れる。

「オオオオ！！」

その様子を見て尚向かってくる数人の敵兵。

バンツ！と地面に手を当て、火柱を立てて敵を一掃する。

「どーすんだカノン！！キリがねえぞ！！」

剣から電撃を放ちながらヴォルトが叫ぶ。

確かに敵兵は城の中からぞろぞろ出てくる。

「でもこんだけの数…城の中も誰もいねえんじゃないの！！？」

敵兵を斬りながら俺が答える。

「いえ…まだ大物がいるようです。」

俺の背後にいた敵を風で吹き飛ばしながらジルクが言う。

ジルクの視線の先には…

屈強な長い茶髪の男。

その男がニイと笑ったと思ったら…

「グオオオオオ！！」

熊に姿を変えた。

「獣人かよ…！！」

めんどくせえ…！！

「ハッ！やっとやりごたえのありそうな奴出てきたじゃねえか…！！」

ヴォルトが不敵に笑って虎に姿を変えた。

「残ってる奴らはガイクに任せる。」

俺がヒナタにやった様に直接頭の中にヴォルトの声が響く。

『行けよ。カノン。』

それと同時に熊に向かっていくヴォルト。

「…っ!!」

くそ…!!

「来い! ジルク!」

「はっ!」

俺はジルクだけを連れて城に入った。

## 第六十三話

城の中を走り続けると闘技場の様な広間に出た。

「カノン様！来ます！！」

ジルクの声に前を見ると数人の敵兵。

「チツ！！」

まだ居んのかよ！！

「退けよ！！」

剣から炎を放つ。

タイミング良くジルクが風を吹かせる。

炎が風によって敵兵を包む。

けど…

「オオオオオ！！」

一人の鎧を着た兵士が炎の中を突っ切って突撃してくる。

「なっ…！！？」

マジかよ…っ！？



反応が遅れた俺に刃が迫る。

けれど俺の前に躍り出る影。

キーン！という鋭い金属音。

ジルクが剣を受け止めていた。

「ジルク！」

「油断大敵ですよ…カノン様…！」

けどギギギ…と力でジルクが押される。

「くっ…！」

「らアっ…！」

ジルクがやられるのを見逃す訳にはいかない。

ジルクの横に出て相手に向かって剣を降り下ろす。

だが相手が下がり、俺の剣は宙を切る。

こいつ1人でもめんどくせえのにこちらに向かってくる足音。

「苦戦していますね。カノン様。ジルク。」

俺達が来た扉の反対側の扉から現れる人物。

そいつは…

「バルド…!!」

「お久しぶりです。我が主。」

俺の家族を殺した張本人だった。

## 第六十四話

「バルド…!!」

短い黒髪を揺らしてクスクス笑うバルド。

「苦戦するのも当たり前ですね。それは貴方達が戦ってきたのとは少し違いますから。」

「…?」

ジルクが不審そうにバルドを見る。

「…どういう事だよ。」

俺が不機嫌丸出しで問うと笑みを絶やさずに言った。

「普通の兵では貴方達の足止め程度にしかありません。なので少し仕掛けを施したのですよ。」

仕掛け…?

「カノン様の炎とジルクの風…その二つは『それ』には通用しません。」

それ…鎧の兵士を見ながらバルドが言う。

こいつ…!!

「デメエ！！兵士を…生き物を物扱いしてんじゃねえ！！」

俺が怒鳴ると嘲笑う様に奴は言った。

「ならば貴方はどうなのです？」

「！？」

「兵士を操り、戦争を起こす。道具を使っているのと同じ様なものでしょう。そして壊れたり、傷つけば捨てる。」

「そんな…っ！！」

反論しようとした俺をジルクが手で制す。

「主人の為ならば物になる。そう決めたのは我々従者。使えない物は捨てられる。それは仕方の無い事ですよ。」

「ジルク！！」

そんなの許さねえ！！

「カノン様。」

ジルクの声に顔をあげる。

「兵を使い、戦わせる。そして時には斬り捨てる。それが…」

「それが王です。」

「…ッ!!」

ジルクの言葉に何も言えなくなつてまた俯く。

「…相変わらず子供のままですね。」

「ジルクを、殺しなさい。」

鎧の兵士に命ずるバルドの声が聞こえる。

「カノン様。御命令を。」

…そーかよ。

「…分かった。」

「ジルク。あの鎧を倒せ。命令だ。」

「御意。」

満足そうに笑つたジルクが剣を構える。

俺の相手は…バルドだ。

## 第六十五話

「よろしいのですか？ ジルクにあれを任せて。」

「ジルクがあんな鎧に負ける訳ねえだろ。」

バルドの問いに俺が即答する。

「左様ですか。ではこちらも…はじめましょうか。」

そう言つてバルドが中段に剣を構える。

それに対して俺は上段に剣を構えた。

「らぁッ！！」

ダンツと地面を蹴つて連続でバルドに突きを放つ。

腹に三発、右肩に二発、左足に三発突きを放つが全て避けられる。

それに苛立つて力一杯剣を降り下ろす。

ギンッ！と言つ金属音。

力一杯降り下ろしたのにも関わらずバルドは余裕な表情で俺の剣を自分の剣で受け止めている。

「…懐かしいですね。」

「何が…ッだよ…!？」

剣と剣が交わり力比べになるとぼつりとバルドが言った。

「貴方様とミズキ様…お二人の剣術の指導をしている時の様です。」

「…なに…言つてんだよ…!!」

兄貴も、指導の時間も…

全部…全部…

「全部てめえが壊したんだろうが!!」

ポツと剣から炎があがる。

その炎がバルドを襲う。

けど地面から現れた土の壁が炎を遮る。

魔法か…!

「ふむ。魔法の力はつけた様ですね。」

「うるせえ!!」

バルドの剣を弾いて一旦距離を取る。

「てめえが…てめえが反乱なんか起こさなければ良かったんだよ!!」

「……。」

「!？」

俺の怒鳴り声に一瞬…本当に一瞬。

バルドが辛そうな顔をした。

けどさっきの嘲笑う様な顔に戻ると言った。

「その減らず口…黙らせますよ。」

バツとジルクが戦っている方向に手を向ける。

すると轟音と共にさっきとは比べ物にならない大きさの土の壁が現れる。

「カノン様!!」

「ジルク!!」

部屋が、土の壁によって二つに分かれた。



## 第六十六話

ーヒナタsideー

なんだろう…？

…嫌な予感がする。

「どうしたのよ。ヒナタ。」

あれから数日後。

アンジェお姉さまとアスカと私で雑談してたのに…

「なんだろう…寒気？」

「お姉ちゃん風邪ー？」

「うーん…風邪とは少し違う様な…。」

「……。」

アスカは？マークを浮かべているが、お姉さまは真剣な顔をしてなにか悩んでいる。

「…虫の知らせかもしれないわね。」

「…虫？」

アスカが首を傾げる。

ていう事は…

「カノン達…？」

お姉さまは神妙な顔で頷く。

「いくらガルスと手を組んでもデルトに勝てるとは限らないわ…。」

「い、行かなきゃ！！」

私が戦場に行けばカノンは龍になれる！

力にならなきゃ！

私が座っていた椅子から弾かれるように立ち上がるとお姉さまに止められた。

「待ちなさい。ヒナタ。」

「なんで！？」

「貴女、ここからデルトまで短時間で行けるの？」

「それは…。」

確かにデルトまで距離がある。

私の足じゃ2、3日かかる。

「どうするべきかしら。…」

真剣な表情のお姉さま。

お姉さまも悩んでる。

「ヒナタお姉ちゃん！アンジェおばちゃん！」

そこに明るい声。

「誰がおばちゃんじゃー！！！」

「どうしたのaska？」

声の正体はaska。

「askaね！走るの早いよ！！！」

私がぼかんとしているとアンジェお姉さまが言う。

「そうよ！askaが居たわ！！！」

ちょ…

「ちょっと待ってよ！！askaに私が乗れと！？」

「うん。」

おかしいでしょうが！！

「アスカ、ヒナタにまだ話してないの？」

「うん」

「じゃあパッと変身しちゃいなさい。」

…変身？

「あい！」

アスカの元気な声と共に、アスカの姿が変わっていく。

「この子…アスカ？」

私の前には赤い毛の犬。

犬と言ってもゴールデンリトルバーより大きくて、人が一人乗れる位の大きさ。

「ええ。アスカは獣人よ。」

初めて知った…！

「アスカならアンター人乗つけてデルトまで行くななんて楽勝よ。」

「ワンツ！」

同意する様にアスカが尻尾をブンブン振る。

「アスカ…お願いできる？」

アスカに問うと当たり前だ。と言うように私の頬を舐めた。

「ほら。ヒナタ。」

アンジェお姉さまの手には私の弓矢。

「生きて帰ってきなさいよ？」

「うん！」

「アスカ！行こう！！」

「ワンッ！」

弓矢を受け取って私は城をアスカに乗って出た。

## 第六十七話

「カノン side」

くっそ…！

何でだ！

何で…！

「何で当たらねえんだよ…！」

いくら攻撃してもバルドに全く当たらない。

叫んだ俺を嘲笑いながらバルドが言う。

「いつまで経っても貴方は変わりませんね。攻撃がワンパターンですよ。」

「うるせえ…！」

それに腹が立って怒鳴る。

バルドが手を地面につく。

すると勢い良く、地面から突起が何本も現れる。

それを転がって避ける。

でも最後の一本が避けきれず肩に掠る。

「ッ!!」

肩から血が噴き出す。

「いつ…てえなあ!!」

お返しに炎をぶつけるがまた地面から壁が現れて炎を防ぐ。

「チツ…」

ズキズキ痛む肩を押さえながら舌打ちする。

「お分かりなのですか？」

「あ？」

「これは今まで貴方と私が行ってきた指導などではないのですよ？」

んな事…

「分かって…」

「殺し合いなのです。」

俺の言葉を遮ってバルドが言う。

「力だけで私を殺せるとても？」

「んな事分かってる!!」

「貴方は分かっている。無意識の内に手加減をしていますよ。」

「そんな訳…」

「…本当にいつまで経っても子供ですね。貴方は。」

フーとため息を吐きながら言う。

「埒があきませんね。」

「そろそろ、終わりにしましょうか。」

「!?!」

殺気を感じて身構える俺を他所にスッと人差し指を一本天井に向ける。

「ご存知の通り、私の専門の魔法は土。それに…」

「この城を支えているのは全て私の魔力がこもった土。」

じゃあ…

「今、ある部分の土の魔力を消しました。」

「後は分かりますね?」

バルドが怪しく笑った。



「その部分は支えがなくなり、崩れます。」

「さようなら。カノン様。」

響き渡る轟音。

「ッ!？」

俺の上の天井が崩れ瓦礫が落ちてくる。

それを最後に俺の意識は途絶えた。

## 第六十八話

―視点無し―

瓦礫の山の前に立つバルド。

その瓦礫の下から覗く真つ赤な血。

そして血溜まりの中の右手。

「あつけない物ですね…。」

カノンのもと思われる右手に呟くバルド。

「私を殺すなどと言っておいて瓦礫に押しつぶされるとは…」

「貴方は私が反乱を起こした時から何も変わっていない。」

棘棘しい反論が聞こえてこない。

血に濡れた右手がピクリとも動かない。

さらにバルドが続ける。

「貴方は何も護れない。国も、民も、仲間も、異世界からの使者も。」

次の瞬間。

開かれていた右手が、拳を作った。

「！」

ズズズツ…と少しずつ瓦礫が動く。

そしてガラガラと音をたてて山が崩れた。

影が立ち上がる。

「うるせえな…。」

ボソリと呟く。

ポタポタと血が滴る。

「俺があ頃と一緒だって言いてえのか？ハッ…下らねえ…。」

鼻で笑ってバルドに剣を向ける。

口の中を切ったのか口端から一筋血が伝う。

「もう失う訳にはいかねんだよ…。国も、民も、仲間も、ヒナタも…！！」

「来いよ！バルド！！」

ボロボロの紅い龍がもう一度剣を握った。

## 第六十九話

ーヒナタsideー

「あれ…！」

アスカと城を出てから何分くらい走ったんだろう。

遠くに見える金色の虎。

「もしかしてヴォルト…！？」

ヴォルトが熊と戦っている。

その周りではドラグレイドとガルムの兵がデルトの兵と戦っている。

「アスカ！お願い！」

「ワンッ！」

アスカに頼んでヴォルトの所まで急ぐ。

「ガアアアア…！」

「グオオオオオ…！」

雄叫びをあげるヴォルトと熊。

「ヴォルト…！」

その後ろに近づく私。

『ヒナタ！？』

頭の中にヴォルトの声が響く。

するとヴォルトが後ろに跳んで熊と距離をとる。

「カノンは！？」

『中だ！城の中！！』

ヴォルトが城を見ながら叫ぶ。

その後ろに爪を光らせた熊。

「ヴォルト！！」

『ッ！？』

私が叫んでももう遅い。

「グオオオオ！！」

熊の雄叫びが辺りに響き、爪をヴォルトに降り下ろす。

「ッガアアア！！」

爪が胴体に当たりヴォルトが悲鳴をあげて吹き飛んだ。

「キャンッ！」

「きゃあー!!」

ヴォルトが倒れた衝撃で私とアスカも吹き飛ばされる。

「いっつ…」

瓦礫の中、起き上がると右足首に鋭い痛み。

右足首を見ると血が滴っていた。

「この…くらい…!」

痛みを耐えて辺りを見るとアスカの姿が見えない。

「アスカ!どこ!?」

「クーン…」

か細い鳴き声。

「アスカ!?!」

鳴き声を辿るとアスカの下半身が瓦礫に埋まっていた。

アスカの上の瓦礫を退かそうとするが重くてとても私じゃ持ち上げられない。

「!？」

突然殺気が私に向けられる。

「グルルルル…!!」

バツと後ろを見ると先ほどまでヴォルトと戦っていた熊。

弓を構えようとするが、先ほど吹き飛ばされた時に私の手から離れてしまっていた。

「グオオオオ!!」

爪が私に迫る。

「ッ!!」

思わず目を瞑った瞬間。

「ガアアアアア!!」

雄叫びと共に、凄い勢いでボロボロのヴォルトが飛びかかる。

バチバチと電撃が音をたてながらヴォルトの前足に纏う。

その前足が熊の身体に突き刺さる。

「グオオオオオ!!」

暴れるがヴォルトは離れない。

それどころか熊の首に噛みつく。

『オオオラアアアア！！！』

叫びと共に巨体が宙に舞う。

ヴォルトが熊を投げた。

倒れても容赦しない。

そして止めとばかりに電撃を放つ。

「グ…ギャアアア！！」

断末魔と共に動かなくなる巨体。

ガラッ…とヴォルトがアスカの上の瓦礫を退かしてくれた。

『俺達にはまだ敵がいる。』

ヴォルトが私に語りかける。

確かにまだデルトの兵との戦闘は終わっていない。

『行けよ。ヒナタ。アスカは俺が守る。』

「うん！」

私は城へ駆け出した。





## 第七十話

「カノンside」

身体が重い。

頭が痛い。

眩暈がする。

ポタポタと血が滴る。

けど…

まだ戦える。

「……。」

相手も距離を縮めようとしなない。

なら、こっちから行ってやる。

一気に踏み込んで距離を詰める。

「おおおお!!」

鋭い金属音が再び響く。

「力だけでは…私に勝てないと…」

「言ったハズですが!!」

俺の剣が弾かれるが、横に振られた剣を伏せて避ける。

「なにっ…!？」

「んな事…」

「分かってんだよっ!!」

下から炎を放つ。

「くっ…!」

けどギリギリで燃え上がった炎を避けるバルド。

炎は天井にぶつかって消えた。

これも…避けられたか…。

ガクツと膝が地面につく。

「…今のは、危なかったですね。」

「…うつせえ。」

「終わりにしましょう。カノン様。」

…まだだ。

「…まだ、終わりじゃねえよ…。」

「？」

俺の声に首を傾げるバルド。

「俺の攻撃はワンパターンだったよな？だから…俺も考えたんだよ。」

「…まさか。」

俺の視線を追ってバルドも天井を見る。

さっき崩れたせいで穴が開いている天井。

「あの穴の周りはさっきお前が魔力を抜いたから脆くなってるんだろ？」

「では先ほどの炎は…」

「当たったら当たったでそのまま倒そうと思ったんだけどな。」

ニツと笑ったその瞬間。

ビシビシッと音がして天井に亀裂が走る。

「落ちろっ！！！！」

俺の怒鳴り声と共に天井が崩れ瓦礫が落ちる。

「っ…!!」

だがバルドの足下から土が現れ、ドームになってバルドを瓦礫から守る。

でもバルドが油断した瞬間を俺は見逃さなかった。

「おおおおお!!」

土を斬ってドームの中に侵入する。

「バルドオオオ!!!!」

そしてガードが遅れたバルドを袈裟懸けに斬り倒す。

「ぐ…あああ!!」

悲鳴をあげて膝をつくバルドの前に立つ俺。

…こいつを、倒せば全部終わる。

「か…カノン様…」

「何だよ。最期に何か言いたい事でもあんのか!？」

吐き捨てる俺にバルドが傷口を抑え、苦しそうに言った。

「お逃げ下さい…ッ!!」

「…は？」

こいつの言っている意味が分からない。

そこに突如響く声。

「ふうん。最期に少し洗脳が弱まったんだ。」

声のする背後を見ると。

さらりと揺れる長い青の髪。

「でも残念だったね。」

「…もう遅い。」

俺に剣を振りかぶった人物は…

「……………兄貴？」

死んだ筈の兄貴だった。

「カノン様ッ！！！」

バルドの叫び声が響いた。

## 第七十話（後書き）

はい。作者でございます。

簡単には終わらせませんww

鬼とでも悪魔とでも言っ下さいwww

あ、カノンのお兄さんの名前はミズキです。

くミズキ

身長175→180

髪 腰くらいまでの長髪。縛ることもない。髪の色は青。

瞳 青色。

少しずつこの話も終わりに近づいて来ますね。。

最後までお付き合いお願いします。

おまけ

～従者の会話～

ガ「…何故私が貴様と会話しなければいけない。」

ジ「おや？私に対しては口調がガラツと変わるんですね。」

ガ「当たり前だ。貴様なんぞに敬語など寒気がする。」

ジ「ははは（笑）嫌われてますねえ。」

ガ「私は貴様が嫌いだ。」

ジ「私も貴方が嫌いです。」

ガ「……………（怒）」

ジ「……………（余裕）」



ジルクとガイクの会話でした。

ガイクはガラツと口調が変わればいいw w

そしてお互いに毒を吐き合えばいいw w w

第七十一話（前書き）

やらかした…（汗）

どんだけ放置したんだ私…；；；

すいませんでした…；；

## 第七十一話

ーヒナタ sideー

急がなきゃ。

「はあ…はあっ…。」

城の中を走る私。

いつのまにかさっき拾った弓を握りしめる。

カノンとジルクが心配…。

走り続けると何か争っている様な声が聞こえる。

「…なんだろうっ?」

その声が聞こえる方向に向かうと、なにか戦ってる様な…刃物が交わる音も聞こえてくる。

走っているうちに開けた場所に出た。

コンクリートで出来ている大きな部屋なんだけどコンクリートだけじゃないみたい。

多分コンクリートの下に土台として土があるんだと思う。

私からみたら土とコンクリートで出来た体育館みたいな感じ。

「ヒナタ様！お下がり下さい！！」

広間を見回していると突然声が響く。

「！？」

声の方を見るとあちこちから出血してるボロボロジルクがいた。

壁に背を預けて座り込んでいる。

息も荒くてその顔はいつもみたいに余裕の笑みがない。

「ジ…ルク…？」

ジルクの視線の先には鎧を着た人物。

戦場に出て来てる位なんだから多分男の人なんだろうけど…。

その人が持つてる剣からはジルクの血が滴っている。

「！？」

「ヒナタ様！！」

ジルクの前にいたはずの鎧の男が私の目の前に移動していた。

剣が迫る。

けれど足が動かない。

傷も構わずジルクが駆け出した。

剣が突き刺さった。

飛び散る赤い血。

けど全く痛くない。

恐る恐る閉じていた目を開けると、

私を庇ったジルクの右肩に剣が突き刺さっていた。

「ジ…ッ!」

「この方に…。」

ジルクの名を叫ぶ前に響く低い声。

「…手を出すな。」

いつも温厚で優しくかったジルクが初めて…

初めて怖く感じた。

ゴシャン!と何かが潰れる音。

前を見ると鎧の男の顔面に深々とジルクの剣が突き刺さっていた。

赤黒い血が剣を伝う。

男の身体が力を失って後ろに倒れる。

「……………」

「大丈夫ですか？ヒナタ様。」

「ジ…ジルク！」

ぼーっとその様子を眺めていた私にジルクが声をかける。

相手の返り血と自分の血でドロドロだがいつもの様に優しく笑っている。

けれど手で押さえている右肩からはドクドクと血が流れる。

「私の事はお気になさらず。カノンの元に参りましょう。」

「でも…」

血がボタボタ滴っているジルクをそのまま放って置く訳には…。

すると困った様に笑ってジルクが言った。

「貴女様もカノン様も優し過ぎます。もっと、私を道具の様に扱って頂いてよろしいですよ。」

「そんな…」

ジルクを下から見上げる様に見るとやはり困った様な顔をしていた。

「失礼。」

次の瞬間。

ぽふぽふと頭撫でられる感覚。

「貴女様は本当にカノン様に似ておられる…。」

その声は優しいのに…なんだか悲しそうだった。

「あの方を救えるのは貴女しかないのかもしれないかもしれませんね…。」

「ジルク？」

「失礼しました。」

スツと私から離れる。

「行きましょう。カノン様が心配です。」

そうだ。カノンは…

「ジルク！カノンは何処！？」

ジルクが壁際に移動する。

「この部屋はもともと一つでした。」

「へっ？」

「敵の魔法によって部屋が真っ二つに別れてしまいました…。」

「嘘…。」

じゃあ今この部屋の広さは半分なの？

「カノン様はこの壁の向こうです。」

土で出来た壁を触ってコンコンと叩くジルク。

「ふむ…。意外と脆いですね。これならば…。」

少し考えてからジルクが言う。

「ヒナタ様。少し危険ですのでお下がり下さい。」

言う通りに少し下がる。

フー…とジルクが大きく息を吐く。

そして壁に向かって手をかざす。

すると…

もの凄いい音と共に暴風が発生し、壁にぶつかる。

壁にビシビシと亀裂が走る。

さらにジルクが魔力を込めると、風が壁を突き破る。



風によつて出来た壁の穴から見たのは…

笑いながら剣を降り下ろす長く青い髪の男の人。

倒れる黒い短髪の男の人。

その男の人から吹き出す赤い血。

目を見開くカノン。

「バルドおツ!!!」

カノンの叫びが木霊した。

## 第七十二話

「カノン side」

「バルド!」

視界が真っ赤に染まる。

バルドが倒れると俺の頬に血が飛ぶ。

あれ…おかしいな…?

さっきまであんなに慌ててたのに…自分でも驚くほど…

冷静でいられる。

あ…。やべえ…。

ジルクに頼まれた資料にまだサインしてねえや…。

あと商店街のガキ共と遊んでやんなきゃな…。

それからアスカが飴が無くなったって泣いてたな…。

「カノン!」

あれ…?いつの間に壁に穴があいたんだ?

つか…そこにいんのはヒナタとジルクか?

ジルクはともかく…ヒナタ…なんでお前がいるんだよ…。

「ミズキ様…何故…貴方様が…!？」

そーいや兄貴もなんでいるんだ？

「なんで？じゃあ逆に聞くけどさ。」

兄貴が青い髪を揺らしながら言う。

「本当に反乱を起こしたのがバルドだと思ったの？」

「どついつ…事ですか？」

「あはは！傑作！！本当にバルドだと思ってたんだー!!」

身体を震わせながら笑って言った。

「反乱を起こしたのは…」

「この僕張本人だよ。」

ああ…。そういう事か。

笑えてきた。

「何故ですか!？」

「何故？当たり前じゃん。」

「復讐だよ。」

「父上に、母上に、愚弟に、従者に、そして民に。」

「みんなみんな蒼の僕を…王族として異例な僕を認めなかった。」

「信頼も、地位も！全てをこの僕より劣ってる…」

「この愚弟が手にしたんだよ…！」

「がつ…！」

「カノン…！」

兄貴に腹を蹴られてふっ飛ぶ。

いてえな…。こっちにあたるなよ…この馬鹿兄。

「ではバルドは…。」

けろりとして兄貴が答える。

「僕が操っただけだよ。バルド自身は反乱なんて起こす気なんて微塵も無かっただろうね。」

「カノンは見たと思うけどバルドが僕を殺すなんて事は実際起こって無かった。全部僕の幻術。」

「ではバルドが私に反乱を起こす素振りを見せたのは…」

「僕が操ったから。みんなバルドの方に注意がいったから父上和母上の食事に毒をいれるのも楽だったよ。」

…へらへら笑ってんじゃねえ。

「…そうですか。」

ジルクが剣を構える。

「たった今。私の中で貴方は敵と認識しました。」

「…覚悟。」

一気に兄貴の目の前まで踏み込み、剣を降り下ろす。

けど…

「バルド。」

兄貴のその一言で今まで床に伏せていたバルドが立ち上がり、ジルクに攻撃する。

「くっ!!」

しかしギリギリの所でバルドの太刀筋を防ぐ。

ボロボロなジルク。

だけど余裕が無いのはジルクだけじゃない。

は、は、と短く息を吐くバルドの身体からもさつき俺がつけた傷から血が滴る。

その目は血走っていて、もう自我が無いみたいだ。

「ジルクの相手は頼んだよ。」

そう言いながら膝をついている俺に近づいてくる足音。

「僕は楽してこの雑魚を倒したいからね。」

兄貴の口が歪む。

雑魚か…。

「カノン。聞こえるかい？」

「本当にお前は弱いね。父上や母上…民には信頼されてみたいだけだ。」

「何も出来ない。何も護れない奴を王にしてどうするんだか。」

やれやれ、と肩をすくめる。

「本当に…何故…お前が王に…。」

1トーン下がる兄貴の声。

「何故お前が！王に選ばれたんだ！！」

「待ちなさい!!」

声の方を見ると弓を構えたヒナタ。

「…誰?君。」

苛立ちからか不機嫌そうな声。

馬鹿…下がってるよ…。

「誰だって良いでしょ!?!カノンから離れなさい!!」

「なるほどね。やれやれ…。」

頭の上からため息が聞こえる。

「異世界からの子か…。でもね。僕…。」

「部外者に、興味ないんだ。」

「きゃっ!?!」

小さな悲鳴が聞こえる。

ヒナタの手足が動かせない様に氷によって固められていた。

「さて、と。」

俺に向き直る兄貴。

「やっと…やっと、お前を殺せるよ。」

「なにも出来ない。なにも護れない。」

「そんなお前がなんで王に選ばれたんだろうね？本当に。」

首を傾げていた兄貴がポンと手をうつ。

「あ、分かった！」

「…民が、愚かだったんだね。」

「さよなら。カノン。」

はは…。駄目だ…笑える。

スローモーションの様に兄貴が剣を降り下ろす。

ヒナタが俺の名を叫んでいる気がした。

ギンッ！！

戦いが始まってから聞き飽きた位の刃と刃が交わる金属音。

兄貴の剣を受け止めた時に思ったより大きく響いた。

剣越しに見える兄貴の驚いた顔。

「ははは…。違いねえや。」



自分で笑える位掠れた声だった。

「けど…」

「てめえが王になれなかったのは民のせいじゃねえ…！」

「民は愚かなんかじゃねえ…！」

「てめえが愚かだったせいだよ…！この馬鹿野郎…！」

「っ！？」

この馬鹿の剣を力一杯弾く。

俺を睨むこいつの目を睨み返してやる。

「てめえが全部元凶なんだろう！？ならてめえを倒せば終わる…！」

「ミズキ…！てめえをぶっ倒す…！」

それで…全部終わらすんだ。

## 第七十三話（前書き）

ふむ。

どうやら私は継続してなにかをする事が苦手らしいです 致命傷  
お待たせしました。七十三話です。ここで全部明らかにあります。

## 第七十三話

―ジルク side―

確か…

確か、18年前にも彼と戦っていた。

15歳だった彼と14歳だった自分。

「あの時…勝ったのは貴方でしたね…。」

王の側近の地位を狙い、様々なものが試験を受けた。

しかし、結局最後に残ったのは彼と自分。

最終試験は実力試験。

勝利条件は相手を立てなくする事。

魔法と剣術。その両方を駆使して戦い合った。

何時間もの激闘の結果。

勝ったのは…彼だった。

悔いは無かった。

尊敬する人に負けたんだから。

彼は笑って言った。

『お前はまだ伸びる。また戦う時を…楽しみにしてる。』

そう言っただけで差し伸べてくれた手を握ったのを今も覚えている。

皮肉にもこんな状況でまた再戦するとは思ってもみなかった。

それから少し経って、王にご子息が産まれた。

王も王女も民も従者も国中が喜んだ。

しかし、産まれてきた子供は…髪の色も、瞳の色も青。

王族として異例の子だった。

その異例の子は、ミズキと名付けられた。

一部の民はミズキ様を気味悪がり、侮辱していた。

まあ、本当に一部だが。

それが原因だろうか。

ミズキ様は幼いのにに関わらずあまり笑わなくなり、外で遊ぶ等とする事はなく、どちらかというと城の書庫で絵本を読み漁る事が多かった。

王はそんなミズキ様になんとか年齢相応な子供になってもらいたい

がため、最も信頼の厚い、バルドにミズキ様の教育係を申し付けた。

それから一年。

王妃がまた子を授かった。

産まれてきた子供は…

紅の色をした髪を持つ、赤子だった。

国中が歓喜した。

王族を継ぐ、跡継ぎが生まれたのだから。

これですばらくこの国は安泰と、誰もが喜んだ。

その赤子はカノンと名付けられた。

カノン様は明るく、少しやんちゃな所があるが王としての素質は充分あった。

しかし…報われないのはミズキ様だった。

王になるのは自分の筈なのに、王族として異質な体で産まれただけで化け物と罵倒される。

父親と母親は弟の事しか見ていない。

寂しい想いをしてきたのだろう。

自分に見向きもしない両親に見てもらいたいが為、ミズキ様は力を求める様になった。

もし…もし、あの時ミズキ様の想いに気付いていれば、こんな事にはならなかったのかもしれない。

ミズキ様の教育係だったバルドはカノン様の世話もする事になった。

しかし相手は遊びたい盛りの子供。

よくバルドに頼まれ、一緒に世話をした覚えがある。

ミズキ様とカノン様は仲が良かった。

いや、今となって気付いたが、ミズキ様が仲が良いのを装っていたのだろう。

ミズキ様がカノン様に向ける笑顔は作られた物だった。

カノン様が産まれて五年。

ミズキ様は完璧に魔法が使いこなせる様になった。

ミズキ様には才能があった。

カノン様もミズキ様とまではいかないものの魔法を使える様になっていた。

しかし、異変が起きた。

バルドの様子がおかしい。

穏やかだった眼差しは、鋭くなり、冷たくなっていた。

しかも、何故かカノン様に冷たい気がする。

従者や王に、何かあったのか、疲れているんじゃないか。数々の言葉をかけられていたが、ただ首を横に振るだけ。

そんな彼に声を掛けた。

『バルド様！』

『…なんだ？ジルク。』

『どうか…なされたのですか？』

『いや…。』

『そうですか…』

『…ただ、気付いただけだ。』

『…は？』

『…王になるべきは、カノン様では無い。』

『ミズキ様だ。』

『…なにを。』

『この国は間違っている。』

『この国を正す為…反乱を起こす。』

『何を言っんですか…！？』

『止められるものなら止めてみせろ。』

そう言って去っていった彼の背中を何も言えずに見送った。

何も出来なかった。

無力な自分は一人では何も。

だからと言ってただ反乱が起こるのを待っている訳にはいかない。

バルドの発言を他の従者に伝えた。

しかし皆、相手にしてくれなかった。

それどころか、側近の地位を得られなかった事を逆恨みしているのか。と侮辱される。

いつのまにか、味方がいなくなった。

そんな自分の事を唯一信じてくれたのは王だった。

王はもしもの時の為に、自らの息子…カノン様を異世界に行かせた。



その目的は、異世界の住人と交流し、その力を貸してもらったためだ。

龍人族の力は強すぎた為、昔から龍人族の力を抑える魔法があった。

それを使われてしまうと龍人族はただの人になってしまう。

それと同時に、その魔法が無ければ反乱などおこせない。

その魔法は解くことは出来ない。

しかし、無効果にする事はできる。

異世界の住人の魔力はその効果がある。

カノン様は幼いながらそれを理解し、役目を果たす為、両親と離れ異世界で暮らし始めた。

当時、カノン様5歳。ミズキ様6歳。

悲劇は…その5年後に起きた。

珍しく、ミズキ様と王、王妃と一緒に食事をしていたのだ。

その時だろう。

王、王妃の食事にミズキ様が毒を盛ったのは。

従者もミズキ様がそんな事を考えているとは思わず、親子水入らずの時を過ごしていると思っていた。

しかし… なにか… なにかが腑に落ちない。

何故… もっと早く様子を見に行かなかったのだろうか。

様子を見に行った時、まず見たのは真っ赤な部屋と寄り添う様に倒れている王と王妃。

そして、倒れている赤い髪の小さな身体。

王と王妃の息は既に無かった。

だがカノン様は気絶しているだけのようだ。

それだけが救いだった。

しかし、10歳の少年には余りにも辛い現実だった。

『兄貴が…っ！兄貴があ…っ！！』

その言葉にミズキ様まで失った事を知る。

あの時…不審には思っていた。

ミズキ様の遺体が無い。

しかし、王が亡くなった事で後の王がカノン様になり、そして側近が自分となった。

そのせいで、カノン様も自分も多忙になってしまった為、結局ミズキ様の葬儀は遺体の無いまま行われた。

葬儀の後、家族の墓の前に佇むカノン様の顔が忘れられない。

その時だった。この方に一生仕えていくと決めた。

『カノン様…。』

『……。』

『私は…生涯、貴方様にお仕えいたします。』

『貴方を…護りますよ。』

『なら…お前は俺を護れ。俺は…』

『俺はこの国を護る。』

『そしたら…お前も、国のみんなも護る事になるだろ？』

『だから…お前は俺を護れ！命令だ！』

『…御意。』

誓った事は…今でも覚えていますよ。

今でも…ね。

## 第七十四話

血塗れの彼の背後には殺し合う蒼と紅の兄弟。

一体どこで間違ってしまったんだろうか。

「バルド。いえ…」

「バルド様。」

彼の名を呼ぶ。もう聞こえてはいないだろうが。

「王にとって邪魔者は我々従者が排除する。貴方にとっては誠に不本意でしょうが…貴方も邪魔者の一人。」

憧れだった人は…せめて…

「覚悟。」

裏切り者ではなく、従者として死なせてやりたい。

「…うゝ…あゝ…!!」

「あゝあゝあゝ!!!!」

突っ込んでくる彼を迎え撃つ様に駆け出す。

彼の横を走り抜ける。

振り返った時に見えたのは、血を吹き出し、崩れていく彼。

「バルドさ…！」

しかし、その表情は笑っている様な気がした。

倒れた彼をぼーっと眺めていたらぐにやりと景色が歪む。

血を流しすぎたらしい。

ガクンと膝の力が抜ける。

倒れていく中、視界に映るのは主の姿。

「…申し訳ありません。カノン様…。どうやら私は…ここまでの様です…。」

主の勝利を願いながら、従者は意識を手放した。

## 第七十五話

ーヒナタsideー

「はずれ…っない…！」

手足の氷を外そうともがくけれどちっとも外れない。

氷で身体を固定されているせいで後ろで戦っているであろうジルクの姿が見えない。

見えるのは戦っているカノンとカノンのお兄さんだけ。

駄目だよ…

兄弟で戦い合うなんて…。

でも…もしかしたらこれは私が口出ししちゃいけないのかもしれない。

それでも、ここでただ見ているだけなんて嫌。

「ワンッ！」

私の視界に入ってきた一匹の犬。

「アスカ！？！」

「ワンワンッ！！！」

駆け寄ってきたアスカは口から拳程度の小さな火を吐き、氷を溶かしてくれた。

「アスカありがとう！」

「ワンッ！」

バツと後ろを見ると倒れている2つの人影。

「…ジルク！？」

1つはジルク。そしてもう1つは…

「…バルド…。」

ジルクは呼吸と共に小さく身体が上下しているが、バルドはぴくりとも動かない。

心が、傷んだ。

しかし、のんびりしてられない。

カノンは一体…！？

辺りを見回すと素早く動く紅と蒼。

「うおおおおッ！」「」

雄叫びをあげ、ぶつかり合う。

ギギギ…と暫くつばぜり合いをしていたが。

「…ッ!!」

「待ちやがれ!!」

「カノン!!」

カノンのお兄さん…ミズキが龍の姿になって空に飛び立つ。

それを追ってカノンも龍になって空に飛び立つ。

紅と蒼の龍が二匹、大空に舞い上がった。



第七十六話

「ガアアアアアアアアアアア！」

二匹の雄叫びが再び響く。

カノンがミズキに噛み付けば、ミズキがカノンを尻尾で叩き落す。

地面に落ちる寸前で体制を立て直したカノンがまた、ミズキに向かっていく。

そして真つ赤な炎を吐き出す。

それを見たミズキは真つ青な炎を吐く。

赤と青の炎がぶつかり合う。

けど:

「あ……！」

青い炎が赤い炎を多い尽くす様に、圧していく。

空中でじりじりと炎に圧され、後退していくカノン。

「…ツカノン!!」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

青い炎に飲み込まれ、悲痛な声をあげるカノン。

そのままバランスを崩し、まっ逆さまに落ちていく。

「きゃああああっ!!」

「キャンッ!!」

カノンが私達の近くに落ちた為、私達も吹き飛ばされる。

瓦礫がバラバラと身体の上に落ちてくる。痛い。

「…っう…」

なんとか上半身を起こすと見慣れた赤い髪。

「カノン!!」

ボロボロのカノンが半ば瓦礫に埋まる様に倒れていた。

身体のうちここに火傷の傷があるし、赤いコートは所々破けてしまっている。

空からは青い龍。

このままじゃ…カノンが殺される。

そんなの嫌!!

そんな事…

「させない…!!」

私は…無我夢中で弓を構え、矢を放った。

## 第七十七話

「ガァァァアアアァァァ！！！！」

私の放った矢がミズキの右目に刺さる。

もがく青い龍がたちまち人の姿に変わっていく。

「ぐっぐっぐっぐっぐっ！！！！」

矢は抜けているが、帯びただしい量の血が押さえている手の隙間から流れる。

「…あ…。」

「異世界の…っ女か…！！」

フラフラしながらもこちらに歩み寄ってくるミズキ。

私は腰が抜けてしまつて、その場に座り込んだまま動けない。

「誤算…だった…。さきに殺しておけば…。」

その手には剣。

その時に、気付いてしまった。

「泣いて…る？」

ミズキの左目から一筋涙が零れていた事に。

「貴方は…本当に、こんな事をしたかったんですか…？」

自然に発せられた言葉。

「何を…今更…。」

「貴方は！本当に両親や、国の人達を憎んでいたんですか！？」

「うるさい…！うるさい…！！」

苦悶の表情を浮かべる彼。

でも、でももしかしたら…

「貴方はただ…ただ…！」

「愛してもらいたかっただけなんじゃないですか…？」

戻るかもしれない。

「うるさい…！僕は…！！僕は異端な子なんだ…！王族かも分からない…！災いを呼ぶとも言われてきた…！」

子供のように喚く。

私は立ち上がり、血に塗れたミズキの左頬に触れる。

彼はピクツと一瞬身を引いたけれどそんなに抵抗もしなかった。

「ほら…見て。」

血がついた手を見せる。

「貴方の血は…赤色ですよ…？」

それを見てミズキは目を見開く。

彼が欲しくてたまらなかった赤。

それはこんなに近くにあったのに、気付けなかった。

もし、気付けていたら、こんな風にはなかったのかもしれない。

「…すまない。」

ギリツと齒を食いしぼるミズキ。

その表情は本当に苦しそうで。

「それでも僕は…」

「もう…ッ戻れないんだ…!!」

ミズキが剣を振り上げる。

怖くはなかった。

あるのは、彼を救えなかった後悔。

私の声は彼には届かなかった。

…残念だなあ。

「!?!」

何かを感じ取ったミズキが剣を振り下ろす前に振り返る。

それと同時に。――

剣が、ミズキの身体を貫いた。

「…兄貴…ッ!?!」

兄である彼を救ったのは、弟だった。

「…ッ」

ミズキは最初、苦しそうな表情だったけれど、優しく微笑む。

「…これで…」

「…これで…いい…」

「…ッ!?!」

その言葉を聞いたカノンが泣きそうな顔になる。

その後、顔を隠すように俯いた。

ポスツと一回、そんなカノンの頭を叩く様に撫でたミズキはそれを最期に崩れ落ちた。

「兄…貴…」

動かなくなった兄を呆然と見つめるカノン。

俯き、ギュツと一度拳を握り、すぐに元に戻す。

「…カノン…。」

「…泣くな。ヒナタ。」

俯いているため、表情はよく分からないけれどカノンの方が私より何倍も辛いのに、

「…ッ」

私が泣いてどうするのよ。

「…帰ろう。ヒナタ。」

今にも泣きそうな顔で笑うカノンに…

「…うん。」

返事をする事しか出来なかった。



「…本当は分かってたんだ。」

「兄貴がどんな気持ちだったのか。」

「分かってたんだよ。当たり前だろう？」

「たった一人の俺の兄貴なんだからさ。」

「…でも、救えなかった。」

「なあ、本当によかったのか？」

「本当に…あれで良かったのか…？」

答えてくれる人はもういないけれど。

彼は笑っていたから、

多分、これでいいんだ。



## 第七十八話

「お前らアアアアアアアアア！！！！」

「どうしたのカノン！うつさい！！」

客室に入った瞬間聞こえた怒声。

部屋の中には眼を逆三角形に吊り上げているカノンとニヤニヤ笑っているヴォルトとジルク。

ヴォルトの傍ではガイクが鼻で笑っていた。

何気にガイクが酷いことは置いておこつと。

戦争が終わって3日経った。

王であるバルドがいなくなったデルトは今、ドラグレイドの王のカノンがまとめている。

デルトは恐怖政治でまとめられていた様で抵抗は無かった様だけど……。

戦争の被害はドラグレイドもデルトもガルムも大きかった。

死者は何人も出たし……。

カノン達や私も怪我をした。

現にここにいる全員の身体には包帯やらガーゼ等、手当てが施されている。

まあ、私の知っている面子はとりあえず全員生きている。

「なんつーか…カノン…お前って弄られキャラだよな。」

「うっせーバーカ!!」

ヴォルトにプフーと笑われながらカノンが叫ぶ。

ああ。また弄られたんだ。

「ヒナタお姉ちゃん!!」

「のわっ!?!」

言い合うカノンとヴォルトを見ているとアスカがお腹に突撃してきた。

そこ!!女っぽくないとか言わない!!

「あれー?アスカここに来ていいの?」

前は駄目って言われてたのに。

「カノン様が良いって言ったの!」

「俺に感謝しろ!!」

あらま。どういつ風の吹き回しかな？

なら最初から良いって言うてくれればよかったのに。

「ヒナタお姉ちゃん、お城の探検しよー！？」

「はいはい。行こうか。」

手を引くアスカと一緒に部屋から出る。

ドアを閉める瞬間、カノンが寂しそうな眼をしていたのは気のせいかな…？

アスカがヒナタを連れて、部屋を出た。

「……。」

「カノン。」

「分かってる。」

呼びかけられて振り向くと全員さつきとは全く違う真剣な顔をしていた。

「カノン様、時間がもうありません。」

ジルクに言われる。

そんな事は分かっている。

ヒナタは、もう長くはこの世界にいられない。

もともとヒナタはこの世界の住人じゃない。

ヒナタの世界には、この世界のように強い魔力なんてものは無く、  
この世界の強い魔力に身体が合わないらしい。

ヒナタ自身の身体には強い魔力があるがそれももう少しで消える。

これ以上、ヒナタがこの世界にいれば、ヒナタが消滅する。

今までのように俺がヒナタの世界に通えばまたヒナタとも会えるが、  
それは出来ない。

そもそもヒナタの世界に続く門を開いたのは俺の親父だ。

その門が開く期限があと一日で終わる。

門を再び開かせるには膨大な魔力が必要になる。

俺は親父のように膨大な魔力は持っていない。

いや、この世界の住人で門を開くほどの魔力の持ち主は誰もいない  
んだ。

このままヒナタがこの世界のいればヒナタは消滅する。

だからと言ってヒナタを元の世界に返せばもう二度と会えない。

「カノン…どうするんだ？」

そんなの…決まってる。

「…明日の正午。ヒナタを元に戻す。」

消滅なんてさせねえ。

アイツにはアイツの世界がある。

親だっている。

もう、俺の我儘には付き合わせれない。

「よろしいんですか？」

「…ああ。」

もう、会えないかもしれないけれど、アイツだってそれを望んでい  
るハズだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8604s/>

---

幼なじみは龍でした

2011年11月27日21時24分発行